

て六月も牢に入つたりさ。あゝゆう奴等は一體他の土地にもゐるもんかしら。

シヨオン

るなきやとんだ仕合せよ。なぜつて、(妙に言葉に力を入れて)ライリイ和尚さんは、ほつゝき歩いて若い女と無駄口をたゝいてる奴等が大嫌ひなんさ。

ペギーン(盥の水を戸の外に捨てながら、じれつたさうに)

ライリイ和尚さんを擔ぎ出して、自分を苦しめるのはいゝ加減におしよ。(男の聲を真似て)あたしやね、何うしたら今夜一晚おつかなくなく夜が過せるかつて、お前に聞いているだけだよ。(戸の外を見る)

シヨオン(おづくしながら)

ぢや後家のクインでも引つぱつて來やうか。

ペギーン

あんな人殺しみたいな人かい。眞平御免だね。

シヨオン

夜は長いし、闇夜だから、お前がそんなに恐がつてるのを知つたら、父つあんだつて家てるて呉れるよ。それにおらあ、あのはりえにしだのおひ被さつた溝の上ん所に、變な奴がゐるやうな氣がし

てなんねえ。まるで狂犬みてえに、嫌な唸り聲をしてるやあがるんだ。だからお前の恐がるのも無理はねえさ。

ペギーン(敏捷しつこく男の方を振り向いて)

何んだらう。お前はそいつを見たのかい。

シヨオン(後退りをしながら)

おいらにやまるで見えなかつたが、そいつの唸つたり、泣いたりする聲が聞えたんさ。聲の鹽梅ぢや若い男らしいよ。

ペギーン(男の方に進み寄つて)

だけどお前はそこに怪我でもしたのか、それともどうかしたのかつて、側へ行つて聞いてみながつたのかい。

シヨオン

うゝん、聞かなかつたよ。眞暗闇の寂しい所であんな奴と口が聞けるもんか。

ペギーン

ほんとにお前は強いね。だが、若しかそいつの死骸の朝露の中に強張つてゐるのが人に見つかつたら、お前はの時巡査や治安判事に何んて言ふ積りだい。

シヨオン（非常に驚いて）

そんなことまで俺あ考へちやるなかつた。ペギーン、マイク、後生だから、俺があいつの話をしたなんて言つて呉れんなよ。お前の父つあんや、他の連中も今にやつて来るだらうが、喋つちやいけねえよ。彼奴らにこんな話を聞かせてみる、今夜お通夜の席で喋べり散らすだらう。

ペギーン

聞かせるか聞かせないか、そりや分らないね。

シヨオン

ほら、もう戸口の所まで来やがつた。おい、いゝかい。喋つちやいけねえよ。

ペギーン

自分で言はないがいゝよ。

帳場の後に行く。肥つた、元氣のいゝ居酒屋の亭主マイケル、ジエムスが、瘠せた、疑り深さうなファイリイ、カリンと、肥つた、女好きらしい、四十五六のジミイ、フアーレルを伴れて入り来る。

男たち（一緒に）

今晚は。

ペギーン

今晚は。

マイケル（帳場の方へ行かうとする男たちに）

さあ、腰をかけて休んで行きねえ。（火の側におるシヨオンの方に行く）シヨオン、キョーウ、お前何うしたんだい。お前も今夜は濱邊を越えて、ケイト、カシデイさんのお通夜に行く積りかい。

シヨオン

さうちやねえ。マイケル、ジエムスさん。これから近路して、家に歸つて寝やうとしてる所だ。

ペギーン（帳場越に話す）

シヨオンの言ふのが尤もだよ。お父つあん、お前はあたしを店に一人ほつちにしておいて、自分は他家で夜明しをするなんて、恥しいとは思はないのかい。

マイケル（機嫌よく）

ちよつくら家をあげたつて、一晚あげたつて同じわけさ。一杯やつて、死人の原を抜けて戻つて来いなんていふなあ、お前も可笑しな娘だなあ。

ペギーン

あたしが可笑しな娘なら、こんな暗い晩に夜つびてあたしを一人ほつちでおく、お父つあんも可笑しな人だよ。あたしや爐に火をつぎながら、犬の吠聲や、積のなくのを聞いちや、齒をがたくさ

せて恐がつてるんだよ。

ジミイ(機嫌を取るやうに)

何の危ねえことがあるもんか。お前は立派な頑丈な身體を持つてゐて、一度に二人位はこゝにゐる男を殴り倒すぢやねえか。

ベギーン(激昂しながら)

東の谷にや酔拂つた稻刈の若い衆がゐるし、それに鑿掛屋の連中も十人許し野宿をしてるぢやないかね。それからまたあのろくでなしの兵隊たちが——あの罰あたりの奴等が——うよくくと國中をうろついてるぢやないかね。本當にあたしをひどい目に會はす奴がどつさりゐるよ。お父つあんの勝手にするのは構はないけど、あたしだつて一人ほつちぢや家にや残つてないよ。

マイケル

そんなにお前が恐けりや、シヨオン、キョーウに泊つて貰ひな。これからああれがお前の面倒を見るのは、あたり前のことなんだからなあ。

一同シヨオンの方を振り向く。

シヨオン(非常に狼狽して)

父つあん、おいらあ喜んで泊つて上げたいんだが、ライリイ和尚様がおつかねえよ。おらがそんな

ことを爲たのを羅馬法王様だの、大僧正様がお聞きになつたらなんて言はつしやるだらう。

マイケル(馬鹿にして)

こいつあ驚いた。お前は灯を點して爐にあたつとり、彼女を部屋の向ふに寝かしておきやあいぢやねえか。泊つて呉れるだらうね。なんでも上の方に、氣が違ひかゝつてるか死にかゝつてゐる、妙な奴が溝の中にあるつていふ話だからな。今夜誰かに此處に泊つてゐて貰やあ、この娘も無事つていふもんだ。

シヨオン(がっかりして)

おらあライリイ和尚さんがおつかねえつて言つてるだあ。お父つあん、お前おらを變かしちやいけねえよ。俺達はもうぢき夫婦にならうつていふ所なんだからね。

ライリイ(冷笑して)

あの後の部屋に押し込めて、鍵をかけつちまひねえ。さうすりや泊るに定つてゐらあ。そして和尚様に知れたつて罪にやならねえよ。

マイケル(シヨオンと戸口の間に身を置いて、シヨオンに言ふ)

さあ、さうしねえ。

シヨオン(ありつたけの聲を出して)

父つあん、歸してくんな。後生だから外へ出してくんな。ほんとに出してくんなよ。(マイケルの脚を通り抜けやうとしながら) 出してくんなよ。さうすりやまさかの時にや天恩があるぜ。

マイケル(大聲で)

騒がずに爐の傍に坐つてあたつてゐろよ。

押しやり、笑ひながら帳場の方へ行く。

シヨオン(引き返しながら、両手を組み合せて)

あゝ、ライリイ和尚様、御上人様、今日は何處へ隠れたら好いでせう。あゝ、聖ヨセフ様、聖バトリツク様、聖ブリジット様、聖ジエムス様。どうぞお助け下さい。

シヨオン振り返へると戸口に誰もおらないので、戸口に向つて駆け出す。

マイルケ(上衣の端を捕へて)

これさ、お前はどうしても行く氣なんか。

シヨオン(叫ぶ)

父つあん、歸してくんな。よう、歸してくんなつたら、この罰あたりのおいほれ奴。放さなけりや和尚様や、羅馬の御所の緋の衣を著けた僧正様方がお前に罰をあてるぞ。

不意に上衣から彼の身體がすつぽりと脱けて上衣だけがマイケルの手に残り、シヨオンは戸外に來り去

る。

マイケル(振り向き、上衣を高く差し上げて)

へん、堅藏の上著でござる。あゝ、けふび西の國にも、後光が射すほど信心深え男もあつたもんだ。ベギーン、神様の思召で、俺がお前に立派な亭主を探し當てゝやつたから、若い娘つ子が幾人來てお前んとこの畑で草取をしたつて、氣をつける必要はねえ。

ベギーン(自分の所有物の辯護をする)

何も和尚様の言ふことを聞くからつて、お父つあんがあの人を輕蔑するにやあたらないよ。もとはといへば、お父つあんがほつちり許りのお金を拂ふのを惜んで、あたしの手助けをし、あたしを勵ましてくれる小僧を置いてくれないのが悪いんだよ。

ベギーン上衣を父の手からひつたくる。そしてそれを持って帳場へ行く。

マイケル(驚いて)

何處から小僧を雇ふんだい。カースルバアの街を口上言ひに、小僧はゐないかつて怒鳴つて歩かせろつてお前は俺に言ふんか。

シヨオン(細目に扉をあけ、首だけ内に入れて、小さな聲で)

父つやん。

マイケル（シヨオンの眞似をして、小さな聲で）
何うしたんだい。

シヨオン

あの變てこな、死にかゝつてる奴が、溝の向ふから頭を出して見てるやがるよ。お前んとこの鶏を盗みに来たんぢやあるめえかしら、（自分の肩越に後を透して見る）あゝ、大變。彼奴め俺の後をついて來やがつた。（室内に駆け込む）若しも彼奴が俺の言つたことを立聞きしたら、彼奴は俺を生かしちやあおくめえ。俺あこんな眞暗な晩に、淋しい中を家へけえらなけりやならねえんだからなあ。稍暫く一同は好奇心を以て戸口の方を見守つてゐる。戸の外で誰か咳をする。それから癩せぎすな若者のクリステイ、マホンが入り来る。クリステイは非常に疲勞し、またおづおづし、泥まみれになつてゐる。

クリステイ（小さな聲で）

みなさん、今晚は。

一同

あゝ、今晚は。

クリステイ（帳場に歩み寄りながら）

ねえさん、お酒を一杯くんな。（錢を置く）

ベギーン（酒を備めながら）

あにさん、お前は向ふの谷に野宿をしてゐる、鑄掛屋さんのお仲間かい。

クリステイ

うゝん、おいらあえらく歩いたんで疲れ切つてゐるんだ。

マイケル（世話好きさうに）

ぢやあ、火の側へ來るがいゝ。お前は寒さうだし、えらく腹も減つてゐるやうぢやねえか。

クリステイ

ありがと。（コップを取り上げ、左手の方へ少し歩み行く。それから立止つて見廻はす）をぢさん、時々こゝへ巡查が來るか。

マイケル

我家の繁昌してた時分にお前がやつて來たら、戸の上に白い字でな、「この店に於て飲用するビール及び酒類の販賣を免許す」つて書いてあつたのをお前は見たらう。だが今あこの四哩四方に店らしい店はねえ。だから誰も彼もが大信心家だ。さうでねえのは後家一人さ。そんぢやあ巡查は、こゝの家にや用はねえわけだらう。

クリスチイ（安心して）

ぢやあ、大丈夫だね。

火の側に行き、溜息をついたり、呻いたりする。それから側にコップを置いて腰をかける。そしてひどく減入つたので、他の者が皆物珍しさうに眺めてゐるのに氣づかずに、蕪菁を齧り始める。

マイケル（若者の側に行く）

お前は巡査が恐いんかい。ぢや追跡られとるんだね。

クリスチイ

大勢でおらを探しとるんだ。

マイケル

不作だつたし、戦争の後だから、そんな奴あ澤山にゐるだらう。火の近くにあつた靴下などを拾ひ上げ、そつと持つて行く）なにかえ、窃盗でもやつたのかい。

クリスチイ（陰氣な聲で）

もう一寸違つた名で、もう一寸大けえこつたとおらあ思つとるんだ。

ベギーン

まあ、可笑しな人だねえ。お前爲たことが言へないなんて、學校で打たれたんぢやあないかい。

クリスチイ（極り悪さうに）

俺あ物覚えが悪い方で、學校ぢや級の中程にゐた。

マイケル

幾らお前が物覚えが悪いつたつて、窃盗つていふなあ人の物を盗むこつた位えは知つてたつていゝ筈だ。そんなことでお前は巡査に追跡られてゐるか。

クリスチイ（急に家柄を自慢して）

俺あこんでも大百姓の息子だ、俺のおやぢは、（急に聲を落して）なむあみだぶつ。ついこないだ迄、懐金でお前んとこの家を残らず買つても何とも感じねえやうな身上だつた。

マイケル（感心して）

窃盗でねえとすると、何かでつけえことかな。

クリスチイ（得意になつて）

うん、大けえことなんだ。

ジミイ

性質の悪れえ若え衆だ。淋しい夜、若い女の後でも追つ駈けたんだろ。

クリスチイ（ぎよつとして）

え、とんでもねえ。俺あしよつちう堅え人間だ。

ファイリイ（ジミイの方を向いて）

ジミイ、ファールレル、お前は馬鹿だなあ。二三日前までおやぢや百姓だつて、このにいさんが言つたぢやねえか。それを今こんな情ねえ様子をしてゐるんぢや、なんだらう、畑でも取り上げられつちまつたんだらう。普通の人が誰でもよくやるやうな事を多分したんだらう。

マイケル（意味ありげに、クリスチイに向つて）

執達吏かい。

クリスチイ

なんの、さうぢやねえ。

マイケル

差配人かい。

クリスチイ

なんの、さうぢやねえ。

マイケル

地主様かな。

クリスチイ

あゝ、さうぢやねえつたら。そんな話なら、マンスターの町のどんなちつほけな新聞にだつて載つとるよ。だが俺のやつたことあ、紳士だつて、百姓だつて、裁判官だつて、誰もまだ考へて見たことと見えねやうなこつた。

みな好奇心を抱いて喜ばしげに更に近寄る。

ファイリイ

ふん、珍しい若え衆だなあ。

ジミイ

こいつあ、ダン、デビイの曲藝だつて負しつちまふだらう。また、悪え人を戒める和尚さんをだつて打ち負かしつちまふだらう。ファイリイ、なんだかもう一遍訊いて見な。

ファイリイ

何かえ、にいさん、お前は白銀しろめで金貨でも造つたんかい。それとも銀貨でも拵へたんかい。

クリスチイ

おいらあ一錢だつて、一文だつて、そんな真似あしねえよ。

ジミイ

ぢやあ、嬬の三人も持ったんかい。北の國ぢや、ルーテル派の坊様の中に、そんな手合がちらほらあるつていふこつたよ。

クリスチイ（恥しきうに）

おらあ二三人どころか、まだ一人だつて嬬を持つたことたあねえよ。

フィリイ

ぢや、向ふの人達みてえに、ボア人の助太刀にでも行つて、絞め殺し、四つ切りにして、おまけに引つぱり廻されるつていふ判決でも受けたんだらう。おい、若けえの、東の方へ出かけて行つて、クルー人か、ボア人の獨立の助太刀をでもし、戦争をやらかして、血の雨でも降らしたんぢやねえんか。

クリスチイ

おらあ先週の火曜日に、生れて始めて自分の教區を出たんだ。

ペギーン（帳場から出て来て）

ぢやこの人は、何にもしたんぢやないんだよ。（クリスチイに向つて）お前は人殺しも、淫なことも、悪いこともせず、質金も造らなけりや、泥棒も、殴り合も何にもしないんなら、何も逃げ歩かなくつちやならないやうな心配は一寸もないぢやないかね。お前は何にもしやしないんだろ。

クリスチイ（氣を悪くして）

前にや絞首臺、後にや牢屋、おまけに地獄や閻魔様が待つてる、孤子の旅のものに、そんなことを言ふなんて不親切だな。

ペギーン（他のものに黙つてゐるやうに眼で知らせる）

そりやお前話しただけだらう。お前は何にもしやしないんだよ。お前のやうなおとなしい若い衆にや、キイノ、いつてる豚の咽喉を裂くことも出来やしないよ。

クリスチイ（怒つて）

そんなことがあるもんか。

ペギーン（態と怒つた風を見せて）

そんなことがないつて？ あたしや箒の端でお前の頭をぶんなぐるよ。

クリスチイ（驚きの鋭い叫ぶ聲を上げて、身體をペギーンの方に曲げる）

おらを打つなよ。おらあ先週の火曜日におやぢを殺しちやつた。やつぱしおらを殴つたからだ。

ペギーン（非常に喫驚して）

お父つあんを殺したんだつて？

クリスチイ（落ついて）

ほんとに殺しちゃつた。南無聖母様、おやぢの後生をお救ひ下せえ。

ファイリイ(ジミイと共に後退りをして)
怖しい男だな。

ジミイ

あゝ、えれえこつた!

マイケル(大に尊敬して)

そりやにいさん、慥に絞罪だね、絞罪だけの値打は充分にあるよ。

クリスチイ(尤もらしい調子で)

おやぢやひでえ奴だつた。おやぢや年寄の業突張だつたから、おらあとうく我慢がしきれなくなつちやつた。

ペギーン

鐵砲で打ち殺したんかい。

クリスチイ(首を振りながら)

なんにも武器あ使やしなかつた。おらあ鑑札を持つちやいねえんだ。それにおいらあ、法律に反くやうなこたあ出来ねえ人間だ。

マイケル

柄のついてるナイフで殺したんかい。何でも世間ぢや、血だらけなナイフでやるつていふ話だ。

クリスチイ(大聲で、外聞悪さうに)

犬殺しの若者かなんぞのやうにお前はおらを思つとるんだね。

ペギーン

ジミイ、ファールレルがお許を願つて犬を締め殺したやうに、お前もおやぢを締め殺したんぢやないかい。ジミイの殺した犬はね、紐の端で三時間も呻いたりのたうつたりしてゐたよ。ジミイは死んだつていふし、巡査は生きてゐるつて言ひ張つたつけ。

クリスチイ

だが俺あそんな真似あしねえよ。俺は鋤を振り上げて、鋤の端をおやぢの腦天に打ち込んだんだ。するとおやぢや空つほの袋みたいにおらの足元によく倒れて、それつきりうんともすんとも拔しやあがらねえんだ。

マイケル(クリスチイのコップに酒を注ぐやうに、娘に眼で知らせる)

だが何うしてお前は捕まんなかつただらう。ぢやお前はおやぢを埋めちやつたんだね。

クリスチイ(考へながら)

あゝ、埋めちやつたんだ。おらが丁度勦で馬鈴薯を掘りつ返してゐた所だつたから。

マイケル

だけどお前が逃げ出してつから十一日といふもの、お前の後を巡査が追跡ちやこなかつたかね。

クリスチイ(首を振りながら)

一人も追つかけちや來なかつたよ。おらあ豚だらうが、犬だらうが、悪魔だらうが、何にでも打ち向ふ積りで本道を歩いて來たんだがなあ。

ファイリイ(賢さうに頷いて)

奴等が腕づくで行かうといふなあ、ありきたりの人殺しばつかしさ。こんな蒼え衆が氣がたつたら大變だ。

マイケル

さうとも。(クリスチイに)だがにいさん、お前やあ何處でそいつをやらかしたんだい。

クリスチイ(疑り深くマイケルを見守りながら)

そりやをぢさん、遠くの小山の、高い吹きつさらしの端つこの方だ。

ファイリイ(感心して頷く)

用心深え男だなあ。それでなくつちやいけねえ。

ペギーン

お父つあん、お前ほんとに小僧を探す氣なら、ソロモンのやうな智慧を持つたこの若い衆をお雇ひよ。

ファイリイ

巡査だつてこの男を恐がつてゐるんだから、この男を家においときやあ、犬が庭の肥料溜から内證で作つたウキスキーを舐めてゐたつて、奴らあ一人だつて匂を嗅ぎにも來やしめえ。

ジミイ

淋しい土地にや強いもなあ實だ。自分のおやぢでも殺さうつていふ若え衆だから、地獄の旗のついでる投槍を持つた狐の化物にだつて向ふだらう。

ペギーン

ほんとにみんなの言ふ通りだよ。この若い衆を家においときやあ、あたしや半破りのカアキ色の人殺者だつて、幽霊だつて怖れやしないよ。

クリスチイ(驚きと、大得意の情に溢れて)

えれえこつたなあ!

マイケル(丁寧に)

あにさん、お前にいゝお給金を上げてあんまりこき使はないから、こゝに落付いて、小僧さんになる氣はないかい。

シヨオン（心配さうに進み出て）

ペギーン、マイクのやうな娘つ子のゐる堅氣な穩かな家に、飛んでもねえものを引き入れなさんなよ。

ペギーン（非常に鋭く）

お黙りよ。誰がお前に口をききたい。

シヨオン（後退りをしながら）

あんな血だらけな手をした人殺野郎を……

ペギーン（シヨオンを怒鳴りつけり）

お黙りつてば。お前なんぞに馬鹿にされるあたしぢやないよ。（甘つたるい聲で、クリスチイに向つて言ふ）ねえ、あにさん、あたし達が出来ただけのことをしてお前にや不自由はさせないから、こゝの家にお前はるて呉れるだらうね。

クリスチイ（驚きに耐えないで）

こゝにゐりや嚴しい法律から免れるかしら。

マイケル

安全だとも。奴等がお前をおつかながらにしても、この土地の巡査ときたらめつほうおとなしい、渴えてる哀れな奴等ばかりで、野良犬にだつて手をつけやしねえんだから、まして夜中人騒がせなんかするもんかね。

ペギーン（大層親切に、説伏せるやうに）

兎に角、一寸でもいゝから落付いておいで。足の肉刺からは血が出てるし、ウィツクロウの羊みたいに身體中洗はなくつちやならないし、それに草臥れ切つてるんぢやないかね。

クリスチイ（満足して周囲を見廻す）

いゝ店だねえ。おらを購す氣でなけりや、落付いたつて好いんだがなあ。

ジミイ（小躍りして）

そら、占めたぞ。おやぢさんを殺したやうな男が張番をしてゐりや娘さんだつて安全だ。さあ、マイケル、ジエムス、出掛けやうぜ。お通夜の奴等が好い所を飲んぢまふといけねえから。

マイケル（人々と戸口の方へ行きながら）

それはさうと、にいさん、失禮だがお前の名は何ていふんだい。覚えておきたいんだがね。

クリスチイ

クリストファ、マホンていふんです。

マイケル

ぢや、クリスチイさん、翌日の午前に又會はう。まあ、それまでゆつくり休むがいよや。

クリスチイ

みなさん、お寝みなせえ。

人々

お寝みよ。

一同出て行く。だゞシヨオンだけが戸口の所で躊躇つてゐる。

シヨオン（ベギーンに）

お前、危ねえことのねえやうに、おいらに泊つて貰ひたかあねえか。

ベギーン（突慥食に）

お前はライリイ和尚さんが恐いつて言つたぢやないかね。

シヨオン

今度ああの男もゐるこつたから、俺が泊つたつて悪かあるめえと思ふが。

ベギーン

お前さんに泊つて貰ひたいと思ふときにや、泊れないつて言ふんだらう。もうお前にや用はないんだから、さつさと出て行つておくれ。

シヨオン

おらあライリイ和尚さんさへ……

ベギーン

だからライリイ和尚さんの所へ行つて、（嘲るやうな調子で）お前さんもお有難い坊様にでもしてお貰ひよ。あたしやこの人がゐるて呉れりやいよよ。

シヨオン

ひよつとしておらが後家のクインに會ひでもしたら……

ベギーン

さあ、さつさとお歸りつたらさ。騒ぎたてゝ寝る邪魔をおしでないよ。（男を外に押出して戸を鎖す）あの人と來たら、どんなお慈悲深い聖人様だつて肝癪を起しつちまふよ。（忙しく動き廻る。それから前掛をとり、人の眼を避るためそれを窓の所に張つて、ピンでとめる。クリスチイはおづおづ彼女を見守つてゐる。やがて彼女はクリスチイの側に來て、優しく愛想よく口をきく）さあ、にいさん、火の側で手足を伸ばしておやすみよ。道中をして來たんぢやひどく草臥れてるだらうね。

クリアチイ（靴を脱ぎながら、恥しきうに再び）

おらあ十一日も夢中で歩き廻り、夜だつて怖しくつておちく／＼眠られなかつたから、ほんとに疲れ切つちやつたよ。

クリスチイは片足をあげ、肉刺こめに觸つてみて、それをさも憐れむが如くに打ち眺める。

ベギーン（彼の側に立ち、嬉しうに男を見守りながら）

お前は小つちやな足をしてゐるね。屹度お前んとこの家からは、偉い人が出てゐるに違ひないよ。それからね、お前の名はフランスやスペインの有力者や、王様にでもありさうな上品な名前だねえ。

クリスチイ（誇らかに）

あゝ、おらが所は偉かつたよ。広い、風がよくあたるマンスタス地方の肥えた地面を持つてゐるんだよ。

ベギーン

お前は額つきの上品な、男振のいゝ若い衆だこと。

クリスチイ（喜ばしさうな驚きを見せて）

おらがかい。

ベギーン

あゝ、あたしやお前が西から来たか南から来たか知らないが、その若い娘つ子達が、お前のことをさういふのを聞いたことがなかつたかい。

クリスチイ（にが／＼しく）

そんなことあ聞かなかつたよ。おらが育つたあの不作な村は、みんなひでえ嘘つきばつかしだつた。

ベギーン

それが眞實だつたにしろ、お前はこの頃世間を歩きながら、婆や若い娘たちに自身の身上をきかせたとき、その人達から聞いたゞらう。

クリスチイ

ベギーン、マイク、おらあ今夜が今夜まで、俺が身上話をしたことあたどの一個所もねえんだ。おらが此處で斯うあけすけにぶちまけつちまつたなあ人が好過ぎるかも知んねえが、俺が見るところぢやお前たちはみんな好い人だし、お前が親切さうな人だつたから、おらあ一寸も危ぶみやしなかつたんさ。

ベギーン（袋に藁をつめながら）

お前は道々若い娘さんに會ふたんびに、小屋に寄つて同じことを言つたんだらう。

クリスチイ（彼女に近寄り、次第に聲を張りあげて）

おらあ全く今夜まで、何處でもそんなことを言つた覺はねえよ。なぜつておらが十一日間ほつき歩いてる間、低い溝や高い溝越に北を見ても南をみても、石だらけなとびくの畑を見ても、或は沼の端つこを見ても、若いしやなくした女や、男と巫山戯つ散してる美しい跳つかへりの女衆は見たが、お前のやうな娘さんは見たことあなかつた。

ペギーン

若しもお前が草臥れてゐなけりや、お前やあオーエン、ロー、オサリバンや、ディンゲル灣の詩人たちのやうに、きつと洒落た無駄口をたんとたゞくんだらう。あたしやしよつちう聞かされてゐるが、詩人てえものはお前みたいに氣が立つと赫とする、怒りつほいさつぱりした人だつてね。

クリスチイ（前よりも少し近寄る）

おや、お前さんは随分澤山指環を箝めてるね。おらがこんなことを訊いちやあ氣を悪くするかも知んねえが、あねさん、お前さんは未だ狐身かい。

ペギーン

斯んなに若いのに、何で結婚なんかしたがるもんかね。

クリスチイ（安心して）

おらとお前とはよく似とるね。

ペギーン（長椅子の上に袋を載せ、それをたたく）

あたしやまだ、お父つあんを殺したことなんか一度もありやしなないよ。そんなことを爲るのは、あたしにや怖いんだよ。たゞね、お腹ん中がむしやくしやして、無性に腹の立つ所だけがお前に似てるんだよ。おしまひに大立廻りでもあつたんかい。

クリスチイ（女と始めて打ち解けて話をするので、喜びに満ち満ちて）

そんなことあ無かつたね。意地の悪え女が山を越えてやつて來た。おやぢや常から短氣な質だつたが、その意地悪女に嫉かされたときちやあ、悪魔だらうが、悪魔の先祖だらうが、おやぢにや我慢出來なかつたよ。

ペギーン（物好きさうに）

だけど誰もお前を恐がらなかつたなんて不思議だねえ。

クリスチイ（すつかり打ち解けて）

おらがおやぢを殺したその日まで、この愛蘭でおらが何んな人間だか知つてた奴は一人もなかつた。おらあ酒を飲む、覺める、食ふ、寝るといふ、おとなしい、愚直な、可哀さうな人間と思はれて、誰もおらに氣をとめる人なんぞありやしなかつた。

ペギーン（戸棚から蒲團を取り出して、袋の上に置きながら）

でも若い娘つ子達はお前を捨てちやおかなかつたらう。そしてお前がさういふ手合と巫山戯散らす時には、どんなに自惚れたらう。

クリスチイ（無邪氣に首を振って）

女達だつておらを相手にやしやしなかつたよ。嘘ぢやねえ。村でおらを相手にしてくれるものといつたら、口のきけねえ野良の畜生共を除いちや、たゞの一人もなかつたんさ。

火の側へ腰をかける。

ペギーン（失望して）

だがね、あたしやお前がノルウエーの王様や、東の國の人々のやうな生活をしてゐたとばかり思つてゐたんだよ。

ペギーンはテーブルの上にパンと乳の器を置き、それから男の側に來て腰をかける。

クリスチイ（情けなささうに笑ひながら）

王様のやうにだつて？ おらあ夜明から日の暮れる迄働いて、泥だらけになつて土を掘つたり動いたりして、それで楽しみといつたら、眞暗な晩に山に行つて内證で兎を捕へることしかなかつたんだよ。おらあ密獵の巧者だつたね。（頗る無邪氣に）それで、一度なんざあ糞搔棒で魚を突つ刺して、もう一寸で六ヶ月も食ひ込む所だつた。

ペギーン

ぢやお前はたつた一人で外に出て、暗闇の中にあるのを樂みにしてゐたんだね。

クリスチイ

あゝ、おらあ灯が北の方に動いて行つたり、霧の切目に見えたりするのを眺めながら、兎が喫驚して啼き出すのを聞ちやあ藪の中を駆け廻るのが、聖マアチンのお祭の目がお天氣であるやうに嬉しかつたよ。それから獲物をうんと捕へて丘を下つて來ると、大道に鴨や家鴨がのび／＼と寝てゐる。そして肥料溜の手前まで來ると、おやぢの駢の音が聞えるんだ。おやぢや寝てゐる時にや、しよつちう大きな淋しさうな駢をかいたんだ。だが起きてる時にや、怒つたり、罵つたり、悪口を吐いたりする金ぴかの將校みたいに、いつも怒鳴つてばかりゐるやがつた。

ペギーン

後生だから、御免だよ。

クリスチイ

おやぢが幾週間も飲みつゞけた擧句、眞紅な夜明か、そんでなきや夜中に飛び上きて、五月の月の光を浴びたとねり、この様のやうに素裸になつて庭に出たり、星の面へ土塊を投げたり、子豚だつて牝豚だつておびえ死にをしちまひさうな眞似をやらかしてゐる所を見りや、お前さんだつて屹度さう

言ふだらう。

ベギーン

あたしだつてそんな奴なら怖しくなりさうだね。それでお前、お父つあんとたつた二人切りだつたのかい。

クリスチイ

誰も他にやるやしなかつたよ。あれにや世界のあらゆる國々や、領土を股にかけて歩くやうな息子や娘があるんだけど、今日までおやぢを呪はずに來たものはたどの一人もねえんだ。眞夜中に咳やくしやみをしに起きた時にでもね。

ベギーン（頷きながら）

ほんとに珍しい親子だね。あたしや二十とちよつとなるけど、未だ一度だつてそのやうに、お父つあんを呪つたことありやしなよ。

クリスチイ

おらが所のやうなおやぢなら、お前さんだつて屹度悪口をつかずにやゐられないだらう。おらがおやぢが人に迷惑をかけずにいるなあ、巡查に手向ひしたり、人を毆つたりして二月三月牢に入つてゐる時か、そんでなきや精神病院にでも押込められとる間位なもんだ。（沈んだ調子で）御蔭でおらあ

頭をぶち割つた火曜日まで、辛い思をして暮して來たんさ。

ベギーン（彼の肩に片手を載せて）

そんなら此處に安心しておいでよ。誰もお前を虐めやしなからね。お前みたいな立派な若い衆にや、屹度近い中に好いことがあるよ。

クリスチイ

さうだ。おらだつていゝ年だし、力もうんとあれば勇氣もある一人前の男だからなあ……

誰か戸を叩く。

クリスチイ（ベギーンにかぢり附いて）

さあ、大變だ。こんなに遅く人の家を尋ねるもなあありやしねえ。おいらあ近頃、巡查と幽霊とが恐くつてなんねえ。（再び戸を叩く音がする）

ベギーン

誰だい。

聲（戸の多て）

あたしだよ。

ベギーン

あたしつて誰だい。

壁

後家のクインだよ。

ペギーン（急いで立つて、パンと乳とを男に與へながら）

さあ、どんどとお食べ、そして眠さうな振をしてゐるんだよ。あの人はお前が話好きだと見たら、夜明迄でもべちやくちやとお喋りをつゞけるからね。

クリスチイはパンを手に取り、月に背を向けて恥しきうに腰をかける。

ペギーン（荒々しく戸を開けて）

何うかしたの。それともこんな遅くに何か入用なの。

後家のクイン（一歩内に入り、クリスチイを覗いて見る）

あたしや下でシヨオン、キョーウと、ライリイ和尚さんに會つてね、あの人達からお前ん所に不思議な人がゐるつていふことを聞いたんだよ。それでねあの人達は今頃その男が酔拂つて、怒鳴つたり、暴れたりして、お前を困らせてやしないかつて心配してゐなかつたよ。

ペギーン（クリスチイを指差して）

さあ、怒鳴つてゐるかどうか見ておくれ。あれはね、晩の御飯とお乳で眠くなつて、寢やうとして

ゐるところなんだよ。歸つてライリイ和尚さんと、シヨオン、キョーウにさういつてお呉れ。

後家のクイン（進み出て）

あたしや今夜はもうあの人達にや會はないよ。實はね、その若い衆を連れ出して、あたしん所へ泊めてくれるやうにつて、あたしやあの人達から頼まれたんだよ。

ペギーン（ひどく驚いて）

今夜かい。

後家のクイン（側に來て）

今夜だよ。両親のゐない家にそんな人を泊めるのはよくないつて、和尚様は言ひなさるのだよ。（クリスチイに向つて）にいさん、今夜は。

クリスチイ（恥しきうに）

今夜は。

後家のクイン（半ば面白いといったやうな物好きな心で彼を眺めながら）

まあ、なんて愛嬌のある子だらう。お前さんのやうな人の氣を立たせて人殺をさせるなんて、よつほど酷い目に會はせたに相違ないね。

クリスチイ（曖昧に）

さうかも知れねえ。

後家のクイン

さうかも知やないよ。あたしやお前さんがさうやつて、お乳とお菓子を前に置いておづく腰をかけるのを見ると、可哀さうでならないよ。おやちさんを殺すよか、教義の問答でも言つてる方がお前さんには適當だよ。

ベギーン（帳場で、コップを洗ひながら）

世の中の偉い人とでも、この人は立派に並んであるける人だつていふことは誰が見たつて分るよ。さあお歸り。あれはね、先週の火曜日から歩きづめて草臥れてるんだから、何時までも邪魔をしないでおくれ。

後家のクイン（おだやかに）

にいさん、御飯が濟んだら二人で出かけやう。お前とあたしとは丁度いゝ相手だよ。八月の市に僅かなお金で歌を唄つてる歌唄ひは、丁度お前とあたしのやうな人達だよ。

クリスチイ（無邪氣に）

お前もおやちを殺したんかい。

ベギーン（賤むやうに）

殺せるもんかい。此人はね、古い鶴嘴つるはしでおやちを打つたんだよ。するとね、其鏑きびの毒の爲に血が腐つて、弱り切つて死んぢまつたのさ。そんな卑怯な殺し方をしたんぢや、若い男たちは誰も褒めやしないよ。（クリスチイの左側に行く）

後家のクイン（機嫌よく）

そりや褒められもしないがね、なにしろ子供に死なれ、亭主を失くした後家の方が、お前のやうな路傍で一吋色目をつかはれたとけで、すぐにどんな男の後をでも追つ駈けて行くやうな娘さんよりは、若い人のためには好いお連れだよ。

ベギーン（ひどく怒つて）

後家のクイン、お前にそんなことが言へた義理かい。男の顔が見たいばつかしに、夢中になつて息をきらしきらし山を越えて飛んで來たくせに。

後家のクイン（嘲るやうに笑つて）

あたしがかい。だがねえ、ライリイ和尚さんが、お前さんたちを別々に置かうといふのは利口だねえ。（クリスチイを引つぱつて立たせる）おやちさんを殺すやうな男は、人を迷はせる力が強いとみえるね。にいさん、出かけた方がいゝよ。さあ、立つてあたしと一緒にお出で。

ベギーン（クリスチイの片方の腕を捕へて）

この人あ行きやしないよ。この人はね、こゝの小僧さんになつたんだから、あたしやお父つあんの留守中に、この人を盗まれたり攫はれたりしてなるものかね。

後家のクイン

晝間働く店に夜まで泊る小僧さんは、氣のおかしくなつた小僧さんだよ。だからにいさん、お前はあたしと一緒に、丘の頂上の端つこにちよんびり立つてるあたしの小ぢやな家へお出で。

ベギーン

クリスチイ、マホン、朝までお待ち。この人の家といつたら屋根は孔だらけな草屋根で、狭い庭といふよりや山羊の牧場によささうなんだよ。それからね、家を片づけてくれるものなんか乞食つ子一人るやしないんだよ。

後家のクイン

クリスチイ、マホン、あたしが自分の小ぢやな庭で色々と工夫をしてゐるところを見たら、このあたしが生れつき獨身で暮すやうに出来てる人間だつていふことが、直ぐにお前にも誓へるだらう。屋根を葺くんだつて、草を刈るんだつて、羊の毛を切るんだつて、このメイオウにやあたしに及ぶものは一人もるやしないよ。

ベギーン（大に嘲つて）

ほんとうにお前さんは工夫するやうに生れついてるんだよ。お前さんが黒い牡羊を自分の乳で育てたので、コンノオトの僧上様がその牡羊をシチュー料理にして召上がったら、人間の味がしたつていふのは評判な話ぢやないかね。それからお前さんがフランスから来た、あの毛の赤つちやけた船長さんの顔を刺つてやつて、丘の上をびよん／＼飛び歩いてる山羊の肝臓を絞取つた様な煙草と、三ペニーのお錢を貰つたといふこともみんな知つとるよ。

後家のクイン（面白さうに）

にいさん、お前今のを聞いたかい。一週間も経つとあの調子でお前にも當るんだよ。

ベギーン（クリスチイに）

あんな奴にお構ひでないよ。こゝであたし達の邪魔をしないで、さつさと自分の豚小屋にお歸りつて言つておやり。

後家のクイン

今かへるよ。だがあたしやこの人を一緒に連れて行くよ。

ベギーン（クリスチイをゆすぶつて）

にいさん、お前は啞かい。

クリスチイ（おづ／＼しながら、後家のクインに言ふ）

ありがとう。だが、おらあ此處の小僧さんだからこゝにゐる方がいゝや。

ベギーン（勝ち誇つて）

今のを聞いたかい。さあ、さつさとお歸り。

後家のクイン（部屋を見廻しながら）

こんな時刻に山を越すのは淋しいよ。だからこの人が一緒に来て呉れなけりや、あたしや今夜一晩お前さんたちと一緒に泊めて貰はう。ベギーン、マイクさん、あたしをその長椅子の上に寝かせておくれ。あの人は爐の側に寝ればいゝよ。

ベギーン（突然、烈しく）

ほんとに駄目だよ。さ、歸つておくれ。歸らなけりや追ん出すよ。

後家のクイン（肩掛を取り上げながら）

やれ／＼年を澤山に取るとこんなにも嫌はれるもんかね。（クリスチイに）いさん、お寢み。だがねお前、あの娘とふざけつ散すとんだ目に會ふよ。あの娘はキラキインのシヨオン、キョーウと夫婦になるんでね、羊の皮の書付の來るのを待つてるばつかしさ。このことをね、あたしや和尚さんたちから、お前に聞かせて呉れつて言ひつかつたんだよ。

クリスチイ（戸を鎖してゐるベギーンの向ふに行き）

あの人のあとで言つたことは何だい。

ベギーン

嘘つばちばかりだから氣におしでないよ。だけどあたしに隠目附かくしめつけをよこすなんて、シヨオン、キョーウもいけぶとい奴だこと。彼奴め、今にとつ捉まへてやるから見るがいゝ。屹度とつ捉まへてやるから。

クリスチイ

ぢやお前さんはその人と夫婦にやならないのかい。

ベギーン

あたし達を夫婦にしてやらうつて僧正様がわざ／＼歩いて來なすつても、あたしやあの人と一緒になるのは嫌なこつたよ。

クリスチイ

やれ／＼有難いこつた。

ベギーン

さあ、お前のお床が出来たよ。あたしが先達から自分の手で綿を入れた蒲團だから、お前のび／＼とお寢み。明日の朝鶏が鳴いたらあたしが起して上げるから、それまで寢ておいで。

クリスチイ（ベギーンが奥の部屋に行きかけたとき）

どうぞ神様、マリア様、聖バトリック様、親切なるこの奥様を御恵み下され、そして其親切なる言葉に褒美を下したまはんことを祈ります。（ベギーン奥の部屋に入り戸を閉す。クリスチイはゆつくりと床をのべ、蒲團を觸つて見て非常に満足する）うん、こいつあさつぱりした柔けえ床だ。あゝ、とんだ運が向いて来て好い知合が出来たもんだ。——いゝ女が二人して俺がやうなものゝ爲に喧嘩をしてくれる。——おらあなせもつと早くおやぢを殺さなかつたらうと、今夜になつちやあ考へらあ。

（幕）

第二一幕

前景に同じ。朝日まばゆし。クリスチイは快活な、又愉快さうな顔附をして女持の靴を磨いてゐる。

クリスチイ（棚の上の瓶を敷へながら獨言をいふ）

向ふに五十。彼方に十。あの上に二十。瓶が八十。コップが六つに毀れたのが一つ。皿が二枚。盃は澤山と。壺はあんなに澤山あつちや、學校の先生だつて勘定するにや骨が折れるだらう。それからあんだだけの酒がありや、クレアの國中の金持や學者達をみんな酔つばらはして仕舞へるだらう。（靴を丁寧に下に置く）これでねえさんの靴も晩に穿いてけるやうに綺麗になつた。だがなんてねえさんのブラシはいゝブラシだらう。（ブラシを下に置いて、鏡の方に徐々に近寄る）ふん、こかあ犬や猫と違つた賑かな連中と一生騒いで暮せる面白い場所だ。ほつゝき廻つて煙をふかしたり酒を飲んでたりして、一日の用といつたら、暇を見てお客に壺の口を抜いてやつたり、盃を拭いてやつたり、ピカピカ光つたコップを漱いでやるだけのこんだ。（壁から鏡を取外して、椅子の背に立てかける。それから鏡に面して腰をかけ、顔を洗ひ始める）おらがこんななに好い男振だといふこたあ、おらあ本當に知んかつた。我家の鏡が天女の顔でもひんまけて戴腕に映すやうなひでえもんだつたせいでもあるが。おらあ今日からあしやれることにしやう。おしやれにしたら皮膚がすべすべしてき綺

麗になつて、年がら年中土や肥料をあびて畑を耕しとる、無恰好な若い奴等と違ふやうになるだらう。(びつくりする)ねえさんが歸つて来たかな。(外を見る)知らねえねえさん達だ。こいつあ困つた。著物も著ねえで此長い頸を出しつばなしやぢ、何處へ隠れやう。(外を見る)著物を著つちまふまで部屋に入つてた方がいよ。

上衣と鏡とを拾ひ上げて、奥の部屋に駆け込む。スラサン、ブレイテイ戸を押しあけて内を覗き込み、そして戸を叩く。

スウサン

誰もゐないよ。(再び叩く)

ネリー(スウサンを押し入れ、オナ、ブレイク及びセーラ、タンジイと共に續いて入り来る)

二人が丘に出歩くにしちや早過ぎるねえ。

スウサン

シヨオン、キョーウがあたし達を睥くらかしたんで、そんな人はてんで此處にやるやしないんだよ。

オナ(藁と蒲團を指して)

あれを御覽、昨夜あそこで寝たんだよ。だがもう行つちまつたんぢや詰らないねえ。折角こんなに早く起きて一生懸命に山を駆け上がつて来たのに、おやぢさんを殺した人に逢へないなんて

情ないことだらう。

ネリー

ありやその人の靴ぢやないかしら。

セーラ(靴を取り上げながら)

若しもさうなら、おやぢさんの血がついてる筈だよ。殺された人達からは血が流れ出て、滴り落ちるもんだつていふことを、新聞で讀んだことがないかい。

スウサン

セーラ、タンジイ、そら、そりや血だろ。

セーラ(匂を嗅ぎながら)

沼の水らしいね。だけどこれは確にその人の靴に違ひないよ。あたしやこんなに白つほい泥だの、赤つちやけた泥だの、海の細い砂だのよくつゝいてる靴を見たことがないね。屹度その人はよつほど歩いて来たに相違ないよ。

右手に下りて行き、男の靴を片つぼう穿いて見る。

スウサン(窓の所に行き)

ひよつとしたらマイケルおぢさんの靴を穿いてベルムレットの方へ逃げちやつたのかも知れないね。

セーラ、タンジイさん、お前おつかけといでよ。北の海岸で、やきもちやきの夫人の鼻に嚙付いた男を見たさに、驢馬の車に鞭をかけて、十哩も走らせたのはお前ぢやないかい。(外を見る)

セーラ 片方の靴を穿いたまゝ窓の方へ走つて行く)

おしやべりはお止め。あたし達は瞞されたんだよ。(もう片いつほうの靴をも穿く) ほんとはよく合ふ靴だこと。和尚様の所へ穿いてくのとつとかう。夏冬和尚様の所へ行つたつて、てんで懺悔らしい懺悔をしたことがなくて極りが悪いからね。

オナ (戸に耳を傾けながら)

しつ。部屋の中に誰かゐるよ。(細目に戸を押し開ける) 男の人だよ。

セーラ 大急ぎで靴を脱ぎ、元あつた所にそれを置く。皆一列になつて戸の隙間から内を覗く。

セーラ

あたしが呼んで見やう。にいさん。にいさん。(男首を出す) ベギちやんはおうち。

クリスチイ (鏡を背中に隠し持つて、鼯鼠のやうにすなほに人り来る)

ねえさんはおらが飲むお茶に山羊の乳を一杯入れて、色をつけてくれるつて丘へ山羊を捜しに行つたよ。

セーラ

あの失禮ですけど、おやぢさんを殺したのはあにさんですか。

クリスチイ (鏡をかけてあつた釘の方にすり寄る)

あゝ、おらだよ。

セーラ (持つて来た鶏卵を取り出す)

にいさん、お前よく来たねえ。今日のお菜にと思つて、あたしや家鴨の卵を二つ持つて来て上げてよ。ベギちやんとこの家鴨は駄目だけど、これはほんとに上等なのよ。ねえ、にいさん、あたしの言つてることが嘘かどうか、一寸手を出して御覽。

クリスチイ (恥しさうに前に進み、左の手を出す)

スウサン

それからあたしはバタを少し、大急ぎで持つて来てあげたのよ。お父つあんを殺して遠くから駈けて来たお前さんに、何にもつけずに馬鈴薯を食べさせるのは可哀さうだからね。

クリスチイ

どうも有難う。

オナ

それからあたしは、遠い道程を歩いて来たんぢやお腹が空いてなさるだらうと思つて、お菓子を少

し切つて持つて来てあげたのよ。

ネリー

それからあたしはお前さんに、解へつて間もない牝鶏の雛を持つてきて上げたのよ。——茹でたりなんかしてね。——昨夜和尚様の所に車に轢き潰された雛なのよ。にいさん、この丸々と肥えた胸ん所をさはつて御覽。

クリスチイ

ほんとにはち切れさうだ。

贈物を掴んでる手の甲で觸つてみる。

セーラ

撮んで御覽なさいな。お前さんの右の手は勿體なくつて一寸も使へないの。へセーラそつと彼の背後に廻る。鏡を持つてるのよ。まあ、あたしは鏡を背中につけて持つてる人なんか、今日まで見たことがないわ。お父つあんを殺すやうな人は、よつほどおしやれな人だと見えるのね。(娘たちくすくす笑ふ)

クリスチイ(無邪氣に、笑ひながら贈物を鏡の上に積み重ねる)

みなさん、今日はありがとう。

後家のクイン(大急ぎで戸口から入り来り)

セーラ、タンジイに、スウザン、ブレイデイに、オナ、ブレークかい。まあ、ほんとに何でこんな朝つばらからお前たちは此處へ来たんだい。

娘たち(くすくす笑ひながら)

あれがお父つあんで殺した人なのよ。

後家のクイン(娘達の方に近寄る)

あの人のことはあたしがよく知つてるよ。實はね、あたしや下でやつてる駈つくらだの、跳びつくらだの、投げつくらだの、その外あたしにや名も分らない競技の中へ、この人を入れといたんだよ。

セーラ(元氣よく)

クインをばさん、そりや好いわね。この人が勝にきまつてるから、あたしやお嫁入の仕度のお金を賭けてもいいわ。

後家のクイン

そんなら、お目出度の御馳走をする氣でこの人に充分樂ませたり、食べさせてやらなくつちやいけないよ。(贈物を手に取つて)にいさん、御飯はまだかい。それとももう済んだの。

クリスチイ

まだなんです。

後家のクイン（大聲で）

まあ、お前たちは何ていふ馬鹿な手合だらう。せつせと働いてこの人に朝飯を食べさせておあげ。（クリスチイに）あたしの傍へお出で。（娘たちが茶を入れたり、朝飯の仕度をしてる間に、自分の傍にクリスチイを腰掛けさせる）そしてね、五月のお月様みたいに黙つてニヤ／＼笑つてゐないで、ベギちやんの來ない中にあたし達にお前の身上話を聞かせておくれな。

クリスチイ（そろ／＼喜び始める）

長い話だから聞き倦きるだらう。

後家のクイン

お前みたいな立派な、元氣な、こすい若者は、なにもはにかむにや當らないよ。おやぢさんの頭を打ち割つたのは自分の家でかい。

クリスチイ（恥しきうに、しかし得意になつて）

いゝや、おらたちは寒い、斜面になつた、石つころだらけな、けちな、小つほけな畑を堀りつ返してゐるんだ。

後家のクイン

それでお前お錢でもせびつたのかい。それとも、おやぢさんでも追ん出しさうな、お嫁さんでも貰いたいつてせがんだのかい。

クリスチイ

なあに、おらあそんなことあ言ひやしねえよ。さう、おらが一生懸命畑を堀りつ返してゐると、おやちの奴めおらを捉めえて「この藪の馬鹿野郎奴、他所見ばかりしてゐやがる。さあ、さつさと和尚様んとけえ行つて、近え中に後家のカセイと夫婦になるつて言つて來う」つて言やあがるんだ。

後家のクイン

そしてその後家さんはどんな人なんだい。

クリスチイ

山を越えてやつて來た怖い奴なんさ。年齢あ四十五で、目方あ二十四貫と八百もあつて、跛で片眼めつかちなんだ。それでゐて若い男でも老人でもなんでも御座れの評判なふしだらもんさ。

娘たち（クリスチイの周圍を取り巻き、彼に給仕をしながら）

まあ、怖い人だこと。

後家のクイン

それで何うしておやぢさんは、お前をその人と一緒にしやうていふんだい。（鶏肉を少しとる）

クリスチイ（一層満足して食べる）

おやぢや、おらがやうな者には、斯んなせちがらい世の中を渡つて行くのにや、後楯うしろたてになつて呉れる人が入用だつて言ふんだ。だがほんとの所、おやぢや何うしたらその女の家に住はれ、その女のお金で酒が飲めるつかつてそればかり始終考へてゐるたんさ。

後家のクイン

火の氣のない爐よりも、後家の女よりも、宵のお酒よりも、もつと悪いことがあつたんだらう。それでお前はおやぢさんを打つたんかい。

クリスチイ（今少しの所でむつとしさうになり）

なに、さうぢやねえ。「おらあんな女と一緒になるなあ嫌なこつた。おらが生れた時、あの女が六週間もおらに乳を飲ましてくれたつていふことあ誰だつて知つてる。それにあの女は、鴉かみすや海の鳥でさへあの女に悪體をつかれるのを怖れて、あの女の庭にや影もさゝない程な鬼婆ぢやねえか」つて言つてやつた。

後家のクイン（擲掬ふやうに）

そりや好い合棒だね。

セーラ（熱心に）

をばさんの言ふことなんぞ氣におかけでないよ。それでお前さんはお父つあんを殺したのかい。

クリスチイ

するとおやぢが「あの女は手前なんぞにや勿體ねえ位えだ。さつさと行かなけりや、荷馬車に轢かれた蟲けらみたいにおつ潰しちまふぞ」つていやあがつた。そこで「何うしてそんな眞似をさせるもんか」つておらも言つてやつた。すると又おやぢが「さつさと行きやあがれ。行かなきや今夜こそ、悪魔に手前の手足を八つ裂きにさせつちまふぞ」つてぬかしやあがつたんだ。そこで俺も「さうはおらだつてさせねえ」つて怒鳴つて呉れた。

珈琲茶碗を振り廻しながら身を起す。

セーラ

ほんとにさうだともねえ。

クリスチイ

その時丁度お太陽様が雲と山との間に現はれて、おらが顔に青白く輝いたんだ。「野郎に引導じや」と言ひながら、おやぢは大鎌を振り上げた。「なあに手前にこそ」つて言つて、おらも鋤を振り上げた。

スウザン

勇しい話だはねえ。

二五〇

オナ

上手に話すことねえ。

クリスチイ(得々とし、氣丈な様子で、鶏の骨を振り廻しながら)

おやぢは鎌で打込んで来た。そこでおらあ前の方にとび退き、くるりと廻つて背中を左に向けて、おやぢの脳天に一打食はせた。すると咽喉佛の所まで裂けちやつた。

鶏の骨を自分の喉佛の邊まで上げる。

娘たち(一緒に)

まあ、偉いのねえ。ほんとにまあ！ お前さんは慥かにしつかりした若衆よ。

スウザン

きつと神様がこの人を、クインをばさんの二度目の亭主にする氣で此方の路によこしたんだよ。をばさんが一生懸命御亭主さんを探してゐるのに、こゝの土地のものはみんなをばさんをお恐がつてゐるんだからね。セーラ、タンジイさん、この人ををばさんの膝の上のせておやりよ。

後家のクイン

この人を押搦ふんぢやないよ。

セーラ(大急ぎで棚と帳場の方に行き、コップを二つと酒とを持って来る)

ほんとにお前さんたちは英雄だこと。だから船頭さんたちの唄にある外國の戀人たちのやるやうに、腕を組み合はせて一杯飲んでおくれ。(兩人の腕を組合はさせ、コップを持たせる) さあ、さあ、この西の國の評判者の健康を祝つて一杯飲んでおくれ。海賊や、説教師や、酒密造者や、悪いことをする騎手や、それから口の干上がつたお巡査さんや、法律を賣物にしてお腹を肥す陪審官の連中の健康を祝するために飲んでおくれ。

壘を振り廻す。

後家のクイン

セーラ、タイジイ、ほんとに祝杯だねえ、さあ、クリスチイさん。

二人は腕を組み合せ、男は左の手に、女は右の手に盃を持って飲む。二人が飲んでゐる最中、ベギーン、マイクが乳のはいつたバケツを下げて入り來り喫驚する。一同クリスチイの傍を飛び離れる。クリスチイは左手に行く。後家のクインはそのまゝ腰をかけてゐる。

ベギーン(怒つて、セーラに)

何が入用なんだい。

(前掛をいちくりながら)

二五一

煙草を七匁。

ベギーン

お錢があるかい。

セーラ

財布を忘れて来たわ。

ベギーン

それぢや取りに行つてお出で。そしてあたし達を馬鹿にしないでおくれ。(後家のクインの方を向き更に念入りに馬鹿にした調子で)それからクインをばさんは何が入用なんだい。

後家のクイン

糊を一片おくれ。

ベギーン(怒鳴り出す)

へん、ノアの洪水から、お前さんそこには家内中に腰巻一枚、シャツ一枚、白いもんなんか無いぢやないかね。お前さんのやうなものに賣る糊は、うちにやおあひにくさまだよ。キラムツクの方へでも行つたらいいだらう。

後家のクイン(娘たちと外に出ながらクリスチイの方を向いて)

ベギちゃん、お前今日は大層御嫌機が悪いねえ。にいさん、お前今日の午後から競技があるつていふことを忘れちやあいけないよ。

一同出て行く。

ベギーン(命令的に)

そんな汚らしいものはうちやつてお仕舞ひ。そしてコップを片付けておくれ。(クリスチイ大急ぎで片付ける)腰掛けを壁にくっつけておくれ。(クリスチイその通りにする)それからその鏡を釘におかけ。一體なんだつてそんなものを持ち出したんだい。

クリスチイ(大層すなほに)

なにおらあ身綺麗にしやうと思つてゐた所なんだよ。だがこの土地にや綺麗な若い娘が澤山にゐるね。

ベギーン(烈しく)

若い娘の話なんかお止めよ。

右手にある帳場の方に行く。

クリスチイ

こんな所にゐりや誰だつて身綺麗にしやうと望ま……

ベギーン

お黙りといつたらさ。

クリスチイ(恐る／＼ベギーンの面を一寸眺める。それからやつとの事で鋤を取り上げ、彼女の方に行く。わざと落付いて)

おらがおやぢをぶつ殺したのは、こんなやうな勤だった。

ベギーン(やはり烈しく)

その話はお前夜明けつからもう六遍もしたぢやないかね。

クリスチイ(聞き告めて)

お前が聞きたがらないなあ不思議だなあ。あの娘つ子たちは、その話を聞かうと思つて四哩も歩いて来たんだに。

ベギーン(喫驚して振り向く)

四哩だつて!

クリスチイ(わびるやうに)

おやぢさんが此村ぢやみんな大信心家ばつかしだつて言ひなすつたどらう。

ベギーン

そりや表道路を歩いて来りや大信心家ぢ。然しあの連中は石を跨いで河を越えて来たんだよ。そうして来りや一町程もないよ。それからあたしや今朝、下で郵便配達がかバンに入れて持つてた新聞を覗いてみたんだよ。(意味ありげに力強く)クリストファ、マホン、今日の新聞には大變なことが出てゐたよ。(左手の部屋に入る)

クリスチイ(疑るやうに)

おらの人殺しのことかい。

ベギーン(部屋の中から)

さう、人殺しのことだよ。

クリスチイ(大声で)

親殺しかい。

ベギーン(再び右手に出て来り)

さうぢやない。絞罪になつた人の話が半頁も出てゐたんだよ。嗚呼、にいさん、絞罪になるものは怖いし死方をするんだねえ。そうしてお父つあんを殺したものは一番ひどい様だよ。そんな奴には一寸も同情をして呉れないんだよ。それから死んでしまへばけちな布片に包んで狭いお墓に入れ、石灰を丁度女が茶碗からごみでも捨てるやうに、頭にぶけかけるんださうだよ。

クリスチイ（大層あはれつぽく）

あゝ、困つたなあ。おらあ大丈夫かしら。昨夜お前はおらが前達と一緒にこゝにおりやあ、危ねえことはねえつて言つたぢやねえか。

ペギーン（烈しく）

何處へ行つたつてお前、巡査と夜歩きをして、こそく内證話をするやうなお轉婆な娘つ子に、べちやくちや喋りや危ないよ。

クリスチイ（恐怖にかられて）

お前はあの連中が喋ると思ふんかい。

ペギーン（同情した眞似をして擲論ふ）

何んとも言へないねえ。御氣毒だけど。

クリスチイ（大聲で）

おらがやうな者を絞殺して何が面白いのだらう。

ペギーン

あの連中は風變りな事を喜ぶんだよ。だからお前が繩の端に吊されてぶらくしたり跳いてゐるのを見るためなら、あの連中はどんな眞似でもやりかねないね。お前は立派な、頑丈な頸を持つてる

るから、死に切るまで三十分位はえらく苦しむだらうよ。

クリスチイ（靴を手に取つて穿く）

そんなおつかねえ目に會ふ位ひなら、おらあイソウや、カインのやうに、ネイフィン河の河べりやエリスの平野をほつゝき歩いた方がいゝや。

ペギーン（彼を擲論ひ始める）

その方が好いだらう。この土地へ廻つて来る判事さん達は、無慈悲な方ばかりだつていふことだからね。

クリスチイ（悲しきうに）

この土地ぢや情知らずは裁判官ばかりぢやねえ。（彼女を見上げて）地獄に墮ちたが、えゝさうな天の使たちが神様を見るやうに、女つ子や娘つ子を見張つてるおらがやうな獨りほつちなもんが又こゝを出て行かうといふのに、かえゝさうだとは思つてくんねえのか。

ペギーン

この頃ぢあ貧乏な娘つ子たちが幾千となくメイヨウをほつゝき歩いとるから、お前さんが寂しがる理由はないよ。

クリスチイ（にがしく）

寂しいわきやお前にやよく分るめえ。太陽が暮れて灯が斜に射しとる小さな町を横切る時や、又知らない土地に踏入つて前から後からも犬に吠えられる時や、都會にやうやう辿りつき、腹がへつて氣が遠くなつた時、あつちの溝の蔭からも、此方の溝の蔭からも、接吻や甘いさゝやきを聞いた時にや、どんなに寂しいもんかお前さんにや分るめえ。

ペギーン

クリスチイ、マホン、お前は奇態な男だねえ。あたしや今日のたつた今まで、お前みたいな宿なしものに出會つたことはないよ。

クリスチイ

この世の中に獨りほつちで淋しく暮してりや、誰だつて變てこな人間になつちまふだらう。

ペギーン

あたしや生れてつから今日まで、お父つあんとなつた二人切りでゐるけど、變な處はありやしないよ。

クリスチイ（大層感心して）

お前みてえな惚々するやうな綺麗な女にや、淋しい理由はありやしねえ。男はみんなお前のやさしい聲を聞かうと思つて寄り集つて行くし、お前が路を歩けば小さな小供達がお前の歩く邪魔をする

だらう。

ペギーン

お前のやうなお世辭の旨い人が寂しいつて言ふのも、どうもあたしにや分らないね。

クリスチイ

お世辭が旨い？

ペギーン

女と話をしたことのないものが、今お前が言つたやうなことをどうして言へるもんかね。たゞを前は寂しさうに見せかけて、あたしに取り入らうと思ふんだらう。

クリスチイ

見せかけるなら結構だがおらあ始終寂しいんだ。よう、おらあ明方のお月様みてえに生れ付寂しいんだ。（戸口の所に行く）

ペギーン（彼の話がよく呑込めぬらしく）

だけどあたしにや、お父つあんを殺す位の勇氣のあるお前みたいな立派な若い衆が、なぜ外の人達よりも運が悪いんだか一寸分らないねえ。

クリスチイ

おらにも一寸とも分らねえ。おらの腹ん中は今日は熱湯で煮られてるやうだ。二人は地を中に置いて別れなけりやならねえんだ。さうなりやおらああの世のお上人達と一緒に、希望の光に蘇えるか、神のお裁きを受けるかするその日まで、一朝だつてお前の側でおらが眼を覺すやうなことはあるめえ。さあ、おらあもう杖を持つて出掛けやう。絞殺されるのは情ねえこつたからなあ。(出掛けやうとする) 今日からあおらあこゝの家にや置いてもらへねえのだ。

ペギーン(鋭く)

クリスチイ。(クリスチイ振り返る) こゝへお出で。(クリスチイ彼女の方に行く) そんな棒切れなんぞうつちやつて、爐の中へ泥炭を入れておくれ。お前はこゝの小僧さんだから、あたしやこゝからお前を逃がしやしないよ。

クリスチイ

おらがこゝにゐりや絞罪になるつて、お前は言つたぢやねえか。

ペギーン(やつとのことで全く親切になり)

あたしや下へ行つて、この二三週間こつち愛蘭で起つた怖しい犯罪を讀んで來たけれど、お前の人殺しのことは一寸も出てゐなかつたよ。(立ち上がつて帳場に行く) 多分死骸がめつからなかつたんだらう。それだからお前あたし達と一緒にゐれば大丈夫だよ。

クリスチイ(驚いてのろ／＼と)

お前はおらをかついだんだね。(半ば恐れ、半ば喜んで彼女の後に従ふ) それぢやおらあ此處にゐてお前の側で働けるんだね。さうすりや俺あ今日からあ寂しいこたあねえ。

ペギーン

あの後家や、娘つ子達がお前を唆かしさへしなけりや、お前が此處にゐるのを誰が邪魔をするもんかね。

クリスチイ(狂喜して)

ぢやこれからは俺の耳はお前の聲で一杯になり、お前の眼が俺の二つの眼にびつたりと出合ふんだ。それから俺あお前が暖かいお太陽様にあたままりながらほつゝき歩いてゐるのを眺めたり、お前の足を夜に洗ふことが出来るんだ。

ペギーン(やさしく、然しやゝ困つたらしく)

お前は手近において使ふのにや頼もしい若い衆だとあたしや思ふよ。そしてね、さつきお前は娘つ子たちと一緒になつてあたしを困らせたけど、元氣のいゝ勇ましい若い衆でなけりやあたしや相手にやしないよ。

シヨオン、キヨウウ、背中に籠を背負つて現れる。あとから後家のクインも續いて入り来る。

シヨオン（ベギーンに）

おらが今下を通つて來ると、お前んとこの山羊が、ジミイさんとこの畑の菜つばを食つてたよ。早く行かなけりや屹度食ひ過ぎてはち切れつちまふぜ。

ベギーン

そりやあ大變だ。

ベギーン頭に肩掛を被つて外に駈け出す。

クリスチイ（二入を見くらべる。矢張り元氣よく）

おらも手傳はう。おらあ山羊を取扱ふなあ旨えもんだ。

後家のクイン（戸を閉ちて）

その位のことはあの娘にだつて出来るよ。今ね、シヨオンがお前に長い話があるんだつてさ。

後家のクインは面白さうに微笑を浮べて腰をかける。

シヨオン（ポケットから何か取り出し、それをクリスチイに與へる）

にいさん、そいつを見てくんな。

クリスチイ（見ながら）

米國へ行く片道の切符だね。

シヨオン（心配して震へながら）

おらあそれと、それからおらの新しい帽子とをお前にやるよ。（籠の中から帽子を取り出す）それから二重居敷のこのすほんもやらう。（すほんを取り出だす）それからこの上衣は、この三哩こつちぢや一番黒い、羊の毛で織つたんだ。（上衣を彼に與へる）若しお前がこの土地を去つて、おらたちを昨夜の宵のやうに無事にしてくれるなら、おらあそれをみんなお前にやる。それからおらの祈も、ライリイ和尚さんの祈も添へてやる。

クリスチイ（新に尊大をよそほふて）

だけどお前は何の爲にこのおらを追ん出さうとするんだい。

シヨオン（助けを求めるやうに後家の方を見ながら）

クリスチイ、マホン、おらあ嘘つばちをこね上げるなあからつ下手だから眞實のことを言ふが、俺ああのベギーンと夫婦になるんだ。それでお前のやうな利口な太つ腹な若い衆がああ女の家にゐちやあ、おらあ安心が出来ねえんだ。

クリスチイ（殆んど喧嘩腰で）

それで俺を追ん出すために、鼻ぐすりを呉れやうつて言ふんかい。

シヨオン（哀願するやうな聲で）

あにさん、悪く取つてくれちやあ困るよ。米國の方がお前にやよくないかい。他所の土地へ行きや、お前なんかは金の鎖だの、ピカ／＼した著物が著られ、奥さん衆と馬に乗り廻すことが出来たらう。

シヨオン後家のクインに來て助けて呉れと熱心に眼くばせする。

後家のクイン（側に來て）

この人のいふことは眞實だよ。お前はあんなけちな娘になんか惚れてないで、他所の土地へ行つた方がいよよ。シヨオシはね、世間ぢやみんなあの娘がお前と夫婦になるやうに言つてるけど、あの娘とお前とは釣り合はないつて言ふんだよ。

クリスチイ喜色を浮べる。

シヨオン（驚く程熱心になつて）

あの女とお前とは性が合はねえよ。それにあの女は悪魔みてえに強え質だから、二十日と経たねえ中に互けえに縊り殺しつこでもやるだらう。（自分の手で絞め殺す眞似をする）あの女にや俺がやうな者が適しとるんだ。あの女がひつ掻き散したつて、手も舉げねえやうな大入しい血の巡りの悪れえ人間が丁度彼女にやいよんだ。

後家のクイン（クリスチイの頭にシヨオンの帽子を載せながら）

にいさん、兎に角この著物を試しに著て御覽。さうすりや競技に出る時も大抵貸して貰へるよ。（奥の戸口の方へクリスチイを押しやる）試しに著て御覽。そして著てから返事をしていよよ。

クリスチイ（著物が嬉しいのでにこ／＼する）

ぢや著てみやう。この著物を著、この帽子を被つた所をねえさんに見せてえなあ。

クリスチイ奥の部屋に入つて扉を閉める。

シヨオン（非常に心配して）

あの女に見せてえとよ。後家のクイン、彼奴は此處を出て行かねえ積りぢやないねえかしら。彼奴の身體にや悪魔が大勢ついとるから、ベギーンと夫婦になるんかもしんねえなあ。

後家のクイン（嘲けるやうに）

ほんとにねえ、娘つ子はみんな強い人が好きなんだよ。そしてお前みたいな者は嫌ひだよ。

シヨオン（失望して室内を歩を廻はる）

嗚呼、後家のクイン、おらあ何うしたら好いだらう。彼奴を訴へてやりてえが、若しも訴へてみねえ、屹度彼奴は牢を破つて飛び出て來ておらを打ち殺すにきまつてる。若しもおらがこんな信心深けえ人間でなけりや、おらあ勇氣を出して彼奴の後に近寄り、彼奴の横つ腹に刃物をぶつくらはすのだがなあ。嗚呼、親のねえ子はみぢめなもんだ。始終馴れてるおやぢがありや殺すにも骨が折

れず、みんなの前でも偉い人間になれるんだがなあ。(後家の側に行く)なあ、後家のクイン、おらが牝羊を一疋お前にやる約束をしたら、お前は俺のために何とか旨え工夫をして呉れるかい。

後家のクイン

牝羊一疋ぢや詰らないねえ。だが若しかあたしがあの男と夫婦になつてお前を助けてやつたら、お前はあたしに何をおくれたい。

シヨオン(喫驚して)

お前が？

後家のクイン

さうだよ。さうしたらお前はあたしにお前んとこの赤い牝牛と、牡羊をくれるかい。それからお前んとこの麥畑を通り抜けてもいゝつていふことよ、ミカエル祭の頃に肥料を一荷くれるつていふことよ、あのお前んとこの西の丘で、勝手に泥炭を掘つてもいゝつていふ約束をしてくれるかい。

シヨオン(希望に輝きながら)

屹度するとも。それからおらあおらの持つてる結婚の印しるしにする指環もお前にやるよ。それから又結婚の日にや、お前はあの男を小ざつぱりさせ度だらうから、新しい著物も貸してやるよ。またお前が振舞をする時にや、仔山羊を二疋と、密造酒を二升五合ばかりお前にやらう。それからおらあ

婚禮のお祝ひの時、クロスモリナかバリナから、汽車に乗せて笛吹きを呼んでやらう。それから

……

後家のクイン

もう澤山だよ。黙つておいで。今あの男が出て来るから。

クリスマスチイ新しい著物を著、大層小綺麗になつて出で来る。後家のクインは感心して彼の方に行く。

後家のクイン

お前が今自分の姿を見たら威張つちやつて、あたし達にやろくすつほ口も聞きやしないだらう。お前みたいなもの、このメイオウから西の國へ追ひやつちやふのはほんとに惜しいね。

クリスマスチイ(孔雀のやうに得意になつて)

おらあ行かねえ。たとへこの村が貧乏だつて、おらあ満足してこゝに落付いとるよ。

後家のクインはシヨオンに席をはずす様にめくげせる。

シヨオン

それぢやおらあ潮の干てる中に、競争場を計りに行つて来やう。この著物はこゝへ置いてくよ。それから今日の競争にお前が勝つやうに俺あ祈つてやらう。(のろく出て行く)

後家のクイン(クリスマスチイを嘆稱しながら)

ほんとにお前はいなせな、垢抜けのした若い衆だこと。さあ、一寸腰をおかけ。そしてね、まだ働かぬ中にあたしとお話をおしよ。

クリスチイ（威張りかへって）

おらあベギーンを探しに丘の方へ行かう。

後家のクイン

あとでベギーンを探す時間はどつさりあるよ、お前はゆんべあたしとお前とは好いお連れだつて、あたしが言つたのを聞いたとらう。

クリスチイ

誰も彼もがみんな食べ物だの、著物だのを持つて来て呉れるんだから、おらあ今日からあ連なんぞ欲しかねえ。（帯を固く締めながら、戸口の方へ威張つて歩み行く）たつた一打ちで、おやぢをすほんの帯ん所よで打ち割つた、勇ましい親なしつ子をみんな見たがるだらう。（戸を開ける。それから後へよろめく）なむあみだぶつ。

後家のクイン（側に行つて）

何うしたんだい。

クリスチイ

殺したおやぢの幽霊が歩いて來たんだ！

後家のクイン（外を見て）

あのほつゝき歩いてる人かい。

クリスチイ（夢中になつて）

あの地獄の幽霊に見つからないやうに、おらあ何處かへ隠れやう。

戸が押し開けられる。そして老マホンが戸口の所に現れる。クリスチイは後の戸口へ駈け込む。

後家のクイン（非常に面白がつて）

今日は。

マホン（不愛想に）

今日早くか、昨夜の暮れ方、若けえ男がこゝらを通つたのを見かけなかつたけえ。

後家のクイン

ろくゞ、挨拶もしないで人の家に入つて來るなんて、お前は妙な人だねえ。

マホン

若けえ男を見かけなかつたけえ。

後家のクイン（冷やかに）

どんな様子の人だい。

マホン

身體に人殺しの痕のくつゝいた、手に小つほけな棒を持った、不器量な、みつともねえろくでなし野郎だ。おらあ昨日の昏黄頃、その男がこつちの方に歩いて來たのを見たつていふ宿なし者に遇つたんだ。

後家のクイン

この頃はね、取り入れの男衆が、何百となくスライコ行の船に乗るためにこゝを通るんだよ。お前はそその男に何の用があるんだい。

マホン

おらが頭を鋤の頭で打ち割りやあがつたから、ぶつ殺してやるべえと思ふんだ。(大きな帽子をとり、縋帯と膏藥で一塊になつてゐる頭を多少自慢さうに見せる) 彼奴がこんなにしやあがつたんだ。だけどおらが頭を打ち割られてゐながら、十日間も其奴の後を追つかけて來たなあ偉からう。

後家のクイン(両手で彼の頭を押へ、大喜びでそれを眺める)

大した傷だねえ。だが誰が打つたんだい。追剥かい。

マホン

おらが生みの忤が打つたんだ。だが忤りや追剥どころか、うす汚ねえ吃くり野郎だ。

後家のクイン(マホンの頭をはなし、手を前掛で拭ひながら)

お前さんはね、その傷をお太陽様の光に曝して歩いてるが、世間でよく言ふ腐れ頭にならないやうに用心おしよ。ほんとにひどい傷だねえ。自分の忤がおやぢにこんな深い傷を負はせるやうぢや、お前もよつほどいぢめつけたに相違ないね。

マホン

おれがか？

後家のクイン(ひとりて悦に入つて)

さうだよ。だけど年寄りの剛突張りが若い者をいぢめるのは、随分恥つさらしなことだよ。

マホン(怒つて)

いぢめる所かい。おらあ神様のために命をなくなしたお上人様のやうに、我慢に我慢をして來たんだが、到頭こんなくたばりぞくなひにされて仕舞ひ、老ほれで助けてくれる人もねえんだ。

後家のクイン(ひどく面白がつて)

悪いことにはどれだけの報が來るか、ほんとに不思議なもんだね。

マホン

おらが悪いと。おらをひでえ目に會はせたなあ彼奴だと俺が言つたぢやねえか。彼奴は大つぴらの嘘つつきで、馬鹿けたことばかり言やあがり、褐色羊齒シダの中でお太陽様に腹を向けて、半日も寝そべつてゐやうつていふ野郎なんだ。

後家のクイン

一寸も仕事をしすにかい。

マホン

仕事なんかからつきし出来やあしねえ。たまにやるかと思やあ、乾草の束を藁わらの莖こぎのやうにおつたてたり、たつた一疋しか残つてゐない牝牛を驅り立つて、腰んとつから脚を打つ挿さきあがるんだ。またそんでなきや、自分の持つてる小鳥の鶯うすだのひわだしのをいぢくり廻しとるか、或はおらが家の壁にかけてある小つほけな鏡に、ひつきりなしに自分の姿を映して見てゐやがるんだ。

後家のクイン（クリスチイの方を見ながら）

何うしてそんな馬鹿けたことをするんだらう。無闇と女のあとでも追ひ廻したんかい。

マホン（嘲りの大聲をあげて）

夢中で女を追ひ廻すつて？彼奴あ赤い腰巻をつけた女が、丘の向ふから尻を振り振りやつて來るのが見えやうもんなら、柴ん中に姿をかくして、小枝や葉の隙間から秋波を送つたり、隙間から覗い

てる兎のやうに兩方の耳をおつ立てたりするんだ。女ぢや大笑えさ。

後家のクイン

それぢやお酒の爲なんかい。

マホン

奴あ酒は匂を嗅いただけで酔つぱらつちまふやうな意氣地なした。彼奴あ妙な腐れた胃袋を持つてるやがると見えて、ついこねえだおらが煙管タバコでほんの二三ぶく吸はせてやつたら、彼奴め顔をしかめて苦しがりやあがるんだ。そこでおらあ仕方がなしに彼奴を驢馬の車に乗せて、取上婆さんところまで連れてつたつけ。

後家のクイン（兩手を握りしめて）

まあ、あたしやほんとに今日が今日まで、そんな人の話を聞いたことはないね。

マホン

おらあほんとにお前が聞いたことがねえつて神様に誓つてもいゝや。彼奴ときちや四つの國の國境の、女といふ女のいゝ笑ひ物さ。若い娘つ子たちは、彼奴が路をやつて來るのを見ると草刈の手を止めて、大聲を舉げてマホンとこの馬鹿が來たあいつて笑ふんだ。

後家のクイン

あたしやこの世界も、何もかも皆やつてもそんな人が見たいもんだ。どんな様子の人だい。

マホン

ちつほけな背の低い野郎だ。

後家のクイン

そして色の黒い？

マホン

黒くつてうす汚ねえんだ。

後家のクイン（熟慮してから）

あたしやその男を見たやうに思ふよ。

マホン（乗り気になつて）

みつともねえ年若なやくざもんさ。

後家のクイン

忌まはしい恐ろしい悪黨だね。そしてお前みたいな男だねえ。

マホン

どつちへ逃げたい。

後家のクイン

丘を越えて、北か南に行く近海航路の貿易船を探しに行つたよ。

マホン

今からでも捕まるだらうか。

後家のクイン

下のあの潮の干てる砂つ原を越えて行きやあ、一緒位に行きつけるだらう。あの若い衆は十哩も廻り道をして、入江の端を通つて行つたから。（戸の方を指さす）向ふの端から下へと折れて、それから道に沿ふて北東の方へお出でな。（マホンとつとゝ行く）

後家のクイン（後から大聲で怒鳴る）

追ひついたらうんと響を取つておやり。だけど法律の手にかゝらないやうにするんだよ。お前のやうな仲間内の荒武者でも、黒い冠をつけた判事さんに、判決文を読み聞かせれちややり切れないからね。（戸をバタンと閉めてから、慄き恐れて躡つてゐるクリスチイを暫時眺める。それからブツと噴き出す）ほんとにお前はこの西の國切つての鬼息子だこと。あの男はお前がすほんの帯ん所まで打ち割つたつていふ、可哀さうな人なんだねえ。

クリスチイ（外を見る。そしてそれから後家のクインに言ふ）

この話をベギーンが聞いたら何んていふだらう。あの女はおらに何んていふだらう。

後家のクイン

さうさね、お前の頭をぶん殴つて、外へ追ん出しつちまふだらう。お前はおやぢを殺したなんていふ嘘つばなしを造り上げたけちつくさい嘘つき野郎なんだのに、それを偉いものゝ積りであるたあの娘こそ本當に可哀さうだよ。

クリスチイ（殆んど口もきけない程怒つて戸口の方を向き、獨言のやうに）

死んだ眞似をしやあがつて生きつ返り、おらが後を鮎鼠か鼠を追つかけるやうに此處までおつかけて来て愛蘭の美しい女衆とおらとの仲を邪魔をしやうとしやあがる。あんな骸骨みたいな野郎は……

後家のクイン（前よりも眞面目に）

それがあの人の獨り息子の口のきゝ方かい。

クリスチイ（叫び出す）

獨り息子だと？ あんな野郎はかけ残りの一本きしの齒が痛み、片眼つぶれ、開いてる方の眼で、道の曲り角で七十七疋の魔物でも見るがいゝ。それから又片方撞木杖をついて、びつこ曳き／＼焼けてる墓場に這入るがいゝや。（外を見る）もう海岸を渡つてゐるやがる。神様が高い波を立てゝ、彼

奴をこの世から洗ひ流して下さればいゝがなあ。

後家のクイン（感情を害して）

お前恥しくないかい。（彼の肩に片手をのせ、自分の方を向かせる）何うしたんだい。泣き出しさうな顔をしてゐるぢやないかね。

クリスチイ（絶望し、悲歎にくれる）

おらああの女の額から、智慧の星に輝く愛の光の射してゐるのを見たり、あの女の口から、幼い聖徒に話を聞かせてゐるなさるブリジッド様を思ひ出させるやうな言葉を聞いたんだが、もうあの女はおらに背を向けて、婆さんが節の腫れ上がった驢馬を坂にでも追ひ上げるやうに、おらにひでえことを言ふだらう。

後家のクイン

身體が痒くてひつ搔いてる娘つ子をまるで詩のやうに言つとるんだね。だがあの娘つ子の身體にやあの店で賣つてるとぶろくの腐つた悪え臭が浸み込んでるんだよ。

クリスチイ（性急に）

あの人は天國で商賣してもいゝ位えだ。だがお前、おらあこれから何うしたら好いだらう。偉え者にされたおらが、たつた一日で屹度彼女に寝返りを打たれるんだ。

娘たちの聲が遠くに騒々しく聞える。後家のクイン窓から外を見る。そしてそれから大急ぎでクリスチイの側に行く。

後家のクイン

うちの人を亡くしてつからあたしがやつて来たやうな真似を、お前もやつて行きやいんだらう。あたしや丘の上で長いこと暮してゐるんだよ。或る時にや上機嫌で外に出て日向ほつこをしながら靴下を膝つたり、肌衣を縫つたりし、或る時にや海を走つてる從帆式帆船や、單桅漁船や、網船を眺めたり、遠くの方の何處かに漂ふてゐる、勇ましい毛もくじやらな人達のことを考へたり、又たつた一人で長い年月暮して来たことなどを考へたりしてね。

クリスチイ

おらとお前とは随分似てゐるな。

後家のクイン

だからあたしやお前が氣に入つたんだよ。丘の上の小つほけなあたしの家で、あたしがお前の世話をして上げやう。そこにゐりやお前が人殺をしたかどうかつて、聞きに来る者は一人だつてありやしないよ。

クリスチイ

だが若しもベギーンと別れたら、おらあ何んなことを爲るんだい。

後家のクイン

お前に出来るやうないゝ仕事があるよ。——あたしの小屋の中を白く塗るのに貝殻を捨ひ集めたり、小つちやな鷺鳥小舎をたてたり、あたしが持つてる古ほけた小舟を新しく外張りなどするね。あたしんところの家は近所からかけ離れてるけど、糸車の隅つこでえらい爺さん達に逢ふことも出来るよ。そして其處であたしとお前は内證話をしたり、抱き合つたりして、面白い思ひがたと出来るんだよ。……

聲（外で、遠くの方から呼ぶ）

クリスチイさん、クリスチイ、マホンさん、クリスチイさん。

クリスチイ

ベギーンかしら？

後家のクイン

若い娘たちが下の競争にお前を誘ひに来たんだらう。だけどあたしや今あの連中に、お前のことを何ていつたらいゝんだい。

クリスチイ

ベギーンを承知させる手傳ひをおらにしてくんな。おらあもうあの娘のことばかり思つてるんだ。
 (後家のクイン立ち上がつて窓の所へ行く) あの娘を承知させるのにおらの味方をしてくんな。さ
 うすりやお前が死んだ時、神様が手を伸ばしてお前を極樂への原の近路から、天の御堂の聖母様の
 御子様の足置臺まで導いて下さるやうに、神様に祈つてやるよ。

後家のクイン

旨いお祈りだねえ。

聲(前よりも間近で)

クリスチイさん、クリスチイ、マホンさん。

クリスチイ(氣を揉んで)

来るよ、後生だから俺の味方になつて、おらを助けて呉れるつて約束してくんな。

後家のクイン(暫くの間クリスチイを見つめる)

若しもあたしがお前を助けてやつたら、お前がこゝの主人になつた時、あたしにあたしを通りたい
 道を勝手に通して呉れることよ、牡羊を一疋と、ミカエル祭の時に肥料を一荷くれることを約束す
 るかい。

クリスチイ

空と夜のお星様にかけて約束すらあ。

後家のクイン

そんならあたしやあの老^{おじい}のことは一言も言ふまい。さうすりや死ぬまでベギちゃんにお前のこと
 は知れつこないよ。

クリスチイ

だが若しおやぢが又ひつくり歸つて来るやうなことがあつたら。

後家のクイン

さうしたらあの人は狂人で、お前のおやぢさんぢやないつて言ひ切らうぢやないかね。今日あの男
 が砂つばらで暴れ狂つてるたのあたしが見たつて、誓つて上げてもらいよ。(娘だけ駆け込む)

スウザン

下の競争にお出でなさいな。ベギちゃんはあるつて言つてよ。

セーラ、タンジイ

飛びつくらが始まつてるのよ。あたし達は下の砂つばらで驢馬の競争の時、あなたに著せる騎手の
 服を持つて来て上げてよ。

クリスチイ

ベギちやんが向ふにゐるなら俺も行かう。

セーラ

ベギちやんは小道でシヨオン、キョーウを擲擄つてよ。

クリスチイ

そいぢや前も行かう。

クリスチイ駆け出す。娘たちも彼の後を追つて出て行く。

後家のクイン

だけど若しか一番のおしまひに不首尾ときて、あたしのやうな子供をなくし、亭主に死なれた後家より外にあの男を憐んでやるものがなくなつたら、とんだおなぐさみだね。

後家のクイン退場。

(幕)

三幕

舞臺前景に同じ。同じ日の午後。ジミイ少し酔つた氣味で入り来る。

ジミイ(呼ぶ)

ベギちやん、(奥の部屋に入る)ベギちやん、(再び元の部屋に戻つて来る)ベギちやん、(ファイリイ同じく少し酔つた氣味で入り来る。ファイリイに向つて)お前あの娘に會つたか。

ファイリイ

いゝや、會はねえ。だが俺あシヨオン、キョーウに、驢馬が曳く馬車を持たしてマイケルを迎へにやつた。(鍵がかゝつてゐる戸棚を開けやうとする)だがお通夜の朝あんなにへべれけに酔つちまふなんて、マイケルの奴も呆れけえつた男だ。それによ鍵をかけとくなんてあの娘もあの娘だ。あいつめあの若い野郎に大騒ぎをしてゐるやあがるから、こちとらが咽喉が渴いて死んぢまつたつて、構つちや呉れめえ。

ジミイ

あの娘が大騒ぎをするのも無理はねえよ。彼奴あ玉轉しの奴をぶち負かし、それから輪投げの奴も負かし、射的の奴の鼻をぶつくぢき、駈けつくらでも、飛びつくらでも、躍りつくらでも、何でも

かでも下でやつてる競争にみんな勝つちまやがつたんだからな。よつほど運のいい野郎だ。

ファイリイ

だが今彼奴が勝つたつて、又旨くぶち負されつちまふよ。彼奴あ一言目にや、鋤でぶん殴つておやぢを殺したつて、天狗になつてるやあがる。

自訴するんぢや絞罪にやなりやしねえよ。彼奴のおやぢも今頃あ腐つちまつてるだらう。

老マホン窓の所をのろく通る。

ファイリイ

若しか誰かゞその畑を長い鋤で掘りつ返し、二つに割れた頭蓋骨を二つながら掘りあてたとしたら、新聞や裁判所ぢや何て言ふだらう。

ジミイ

多分洪水で溺れておつ死んだ、大昔の丁抹人だなんて言ふだらう。(老マホン入り来り、戸口の近くに腰を下ろして耳をすませる)なあ、ファイリイ、ダブリンの市のものは、コンノートの小屋にある青い瓶みたいに頭蓋骨を並べて持つてゐるつていふことを、聞いたことがあるかい。

ファイリイ

お前はそれをほんとにするんか。

ジミイ(喧嘩腰で)

刈入れをすませてリバブル通ひの船で歸つて来た若い衆が、見たつて言ふぢやあねえか。その男の言ふことにや、ダブリンの人達あ昔生きてた偉い人たちの頭蓋骨を、見せ物にしとるつていふ話だ。そしてその中にや白い頭蓋骨だの、黒い頭蓋骨だの、黄色い頭蓋骨だの、齒の残らず揃つたのや、たつた一本切りしかねえのがあつていふ話だ。

ファイリイ

そりやまんざら嘘でもあるめえ。俺が小供の時、家の向ふに墓場があつて、そこにお前の腕位長けえ股の骨を持つた男の骸骨があつたつけ。怖しいもんだね。だが俺あ天氣の好い日曜日なんぞにや、よく冗談半分そいつを組み合はせて見たんさ。きらきら光つた骨だつた。あんな骨あ今ぢや世界中何處の市へ行つたつて見られやしめえ。

マホン(立ち上がつて)

ねえつて? この頭を見る。鋤のたんだ一打で打割られたこんな頭は、何處を尋ねたつて、又何時が日にも二つたあ見られめえ。

ファイリイ

ひやあ、驚いた！ だが一體誰がお前を打つたんだ。

マホン（得々として）

俺が産みの悴がわしを打つたんだ。そんなことをお前さん達はふんとにするかね。

ジミイ

ふん、人間の心の中にや、不思議なものが隠されとるんだなあ。

マホン（部屋を歩き廻りながら）

俺あありのまゝの話をして聞かせる丈で、小綺麗な寢床に寝かせて貰つたり、一日に四度づゝ腹一杯食はせて貰つたりして、何百哩つていふ長い道中をやつて来たんだ。（二人の方にやゝ攻勢を取つて歩み行く）一杯飲ませてくんない。さうすりやすぐ聞かせてやる。

後家のクイン入り来り、驚いてマホンの後に立つ。マホンは舞臺の左手におるジミイと、ファイリイに向つて立つてゐる。

ジミイ

あの女に頼むがいゝ。あいつあしヨールの下に隠して持つてる。

後家のクイン（足早にマホンの側に来り）

まあ、お前はこゝにゐるの。ぢやあんまり遠くへは行かなかつたんだね。

マホン

俺あ沿岸貿易船が通るのを見たが、喉が渴いてき足が痠撃つて来たから、「あんな奴あどうにでもなれ」つていつて引き返して来たんだ。（彼女の肩掛の下を見る）なあ、一杯飲ませてくんない。俺あ先週の火曜日から歩きづめでへたばりさうなんだ。

後家のクイン（コップを取りながら、訓すやうに）

ぢや火の側に腰をかけて少しお休み。ほつゝき歩いたり、殴り合をやつたり、太陽さんに曝されたりしちやあ、へたばつたつてあたり前だよ。（携へ持つたる石の瓶の中の密造酒を彼に與へる）さあ、お上がり。お前が幸福で長生きが出来るやうに祝つて上げるから。

マホン（飲みたさうにコップを取つて、火の側に腰をかける）

ありがたう。

後家のクイン（二人の男たちを右手にそつと呼んで）

お前さんたちは知つてるかい。あの男はね、怪我のために今日氣が違つちまつたんだよ。少し前にあたしが會つた時にや、鑄掛屋さんにひどい目に會はせられたなんて、取留のないことを言つてるたのさ。それからクリスチイの話を聞くと、あの男はいきなり立ち上がった、自分の頭を打ち割つたのは自分の悴だつて言ひ出したんだよ。あゝ、ほんとに狂人は怖しいね。あの男は自分に怪我を

させたんだと思つて、これから先誰を殺すか知れやしないよ。

ジミイ(全く信じ切つて)

眞實に怖いこつた。おらあ赤い牝馬に頭を蹴られ、長いこと馬と見れば無闇と殺してゐるが、しまひにや時計の中味を食つて死んぢまつた奴を知つとるよ。

ファイリイ(疑つて)

彼奴あクリスチイを見たかしら。

後家のクイン

見やしないよ。(警告するやうな身振をして)あの人にあの子のことを思ひ出させるんぢやないよ。さもないと若しか人殺でもあつた時にやお前も呼び出されるよ。(ふり向いてマホンを眺め)しつ!ほら聞いてるよ。あたしが今あれを落著かせ一部始終を訊き質すから、まあそれまで待つといで。(マホンの所に行く)

マホン(酒の爲に少しく感傷的になつて)

あゝ情けねえこつた。今日の態はどうだらう。おらあ彼奴を生れた時から手鹽にかけて育て上げたんだ。彼奴は第二讀本を何時になつても讀めねえやうな阿呆ときてるから、始終鑪掛屋ん所の驢馬みてえに跛を曳いたり、打たれてまつ黒な痕を拵へて學校から歸つて來やがつた。親しいものや肉親

のものに手を上げて自分を殺させたり、夜中に一人ほつちで苦しみながら死んで行くなんて、ほんとに情ねえ話だ。

後家のクイン(何と返事をしてよいか分らないので)

さうやつてお前が落著いて話をしてゐる所を聞いちや、誰だつてお前を今日あたし達が見かけた人と同じ人だとは思ふまいよ。

マホン

確におらあ同じ人間だ。今年六十のすたれもんさ。だがこの年まで生きてゐたあ怖しいこつた。悴が親のいふことを聞かねゑで野良をしやがるんで、悴を吐つたり、どやしたり、何のかので親の身體は精も根も盡き果てちまふだ。

ファイリイ(ジミイに)

正氣のやうだ。(後家のクインに)どんな息子だか、お前一つ訊いてみな。

後家のクイン(意味ありげな眼つきで、マホンに)

お前を打つたお前の息子つていふのは、二十一位の、駈けつくらだの、飛びつくらだのゝ上手な若い衆だつたかい。

マホン(咆りたつて憤りながら、彼女の方を向いて)

馬鹿野郎だつておらが言つたでねえか。是からあ彼奴も年寄や若い者に馬鹿にされ、悪口つかれ、亂暴され、又疥癬だらけな野良犬みてえに蹴飛ばされたりして、親なしつ子の味を知るだらう。

大なる喝采の叫聲が稍遠くに起る。

マホン（兩手を耳にあてし）

下ぢや何を怒鳴つてるやがるんだらう。

後家のクイン（一寸ほゝえんで）

あの連中は若者を喝采してるんだよ。この西の國の代表的な鬼息子をね。（再び喝采の聲）

マホン（窓の所に行く）

あの聲を聞くと俺が胸は張り裂けさうだ。それによ、この一週間ていふもなあ、俺が頭の鉢はびくりくしてゐるやがる。彼奴らは駈けつくらをやつてるんか。

ジミイ（戸口から外を眺めて）

うん、さうだ。今あの若者を驢馬に乗つけて、砂つ原で競争をさせてやうつていふんだ。あの遮眼革をした驢馬に乗つてるのが鬼息子だ。

マホン（不思議さうに）

あの若い衆がかい。お前さんたちがあの若い衆を馬鹿者だとさへ言つてくれりや、俺ああの若い衆

を、ほつゝき廻つてる俺が悴にそつくりだと、言ひ切つても好いくれえだ。（自分の頭に片手をあて、心配さうに）ほんとに俺あ駈けつくらを見に行つて來べえかなあ。

後家のクイン（押し止め、鋭く）

およしよ。お前はベルムレットの方へ出掛けた方が好いよ。そしてお前の寝る場所もないやうなこんな處に、ぐすくしておいでよないよ。

ファイリイ

この女の言ふことなんぞ取り合はねえがいよ。この腰掛に載つかりやすつかり見えるだらう。潮が上げて來ない中にやつちまはうつてみんな急いでるんだ。だから下の岩の間を通つてる路をお前さんがおりてくうちにや、あらかた濟んぢまふだらう。

マホン（腰掛の上にいる。後家のクインは彼の側に立つ）

海の端んところがすつかり見える。岬んところから皆がやつて來るな。彼奴が先頭だ。彼奴は一體誰だらう。

後家のクイン

あの若い衆はね世界一の選手なんだよ。そして今日の競争は、何から何までみんなあの人の勝なんだよ。

ファイリイ（外を見る。そして競争に熱中する）

あれをみい。それ、あの若い衆が追ひつかれたぞ。

ジミイ

なあに、大丈夫あれが勝つとも。

ファイリイ

ゆつくり考へてつから言ふがいゝや。ジミイ、ファールル、言ひ切るにや未だ早からう。

後家のクイン（大聲で）

御覽、門のところをあれが駈け抜けてるよ。駈けるのが旨いことねえ。

ジミイ（歡呼する）

若い衆しつかり！

マホン

三番目の奴を抜いたぞ。

ジミイ

すぐとみんなを追ひ越しつまふだらう。

後家のクイン

二十回も競争したつて、あの若い衆はみんなを負しつちまふね。

マホン

彼奴の乗つてる驢馬を見な。星をも蹴飛ばさうだ。

後家のクイン

ほら飛んだ。（夢中になつてマホンを捉へる）落つこつちやつた。あ、又乗つた。屹度みんなを追ひ越しちまふよ。

ジミイ

驢馬を打つてる彼奴の様子を見な。

ファイリイ

それから村の娘たちが彼奴を嗾けてるのを！

ジミイ

終りの一廻りだ。もう決勝點にや人がるなくなつた。

マホン

あの狭いところをみな。沼ん中へ踏込みさうだ。（怒鳴る）旨いぞ！ そうれ通れた！

ジミイ

そら並んだ。

マホン

好い若え衆だ。勇ましいぞ。勝あ彼奴のものだ。

大なる喝采の聲聞ゆ。一同それに聲を合はせる。

マホン（ためらひて）

なんだ。胸上げをしてるやがる。みんな此方へやつて来るな。（怒と驚きの叫び聲を上げて）確にクリスチイだ。假令彼奴が月に跨つてゝも、唾を吐く様子でおらにや彼奴だいふことが分る。

マホン腰掛より飛び下り、戸口に向つて飛んで行く。後家のクインはマホンに追ひつき、彼を引き戻す。

後家のクイン

落著いておいでつたら。あれはお前の息子ぢやないんだよ。（ジミイに）この人を止めておくれ。そんでないとお前も人殺の尻押をした廉で一ヶ月も牢に入れられて、罰金でもとられるのが落だよ。

ジミイ

俺が抑へてるやう。

マホン（腕きながら）

放して呉れ、放して呉れ、皆の衆。おらあ今日こそ彼奴の頭に仇を返してくれろぞ。

後家のクイン（荒つぽく彼をゆすぶり）

あれはお前の息子ぢやないんだよ。あれはね、政府のお允許を受けて大きく商買をしたり、密造酒などを賣つてる、こゝの娘さんと結婚しやうつていふ若者なんだよ。

マホン（喫驚して）

彼奴が一人前の物持の娘と夫婦になるつて！ お前たちはみんな氣が違つてるんか。俺あ女の氣違ひばかり入つてる、狂人病院にでも踏込んだんか。

後家のクイン

頭を打たれて、お前こそ氣が變になつてるんだよ。あの若い衆はね、この西の國のえらものなんだよ。

マホン

ありやおらが忤だ。

後家のクイン

そうら、お前は氣が違つてる。（外に喝采の聲が起る）路の曲り角ところで、みんながあれを喝采してる聲がお前にも聞えるだらう。お前はさつきお前の息子は馬鹿息子だつて言つたぢやないかい。みんなが生れつきの阿呆者を、どうして喝采するもんかね。

マホン（がっかりして）

あの男が気がふれてるんぢやねえかしら。（再び喝采の聲）おらが酔を喝采する者は一人もねえ筈だ。あゝ、俺あこの世界をおつ魂消させるやうな氣違ひになつたとみえる。（片手を頭にあて、腰を下ろす）おらあ何時だつたか、十正の赤鬼が二升人の罎の中に、おらが魂を詰め込まうとしてゐるを見たことがある。それから又或時あ、あなぐま位えある大かな鼠が、おらの耳朶から生き血を吸つてゐるのを見たこともあつた。だが俺あ今日が今日まで、一人前の男とあの涎つ垂しの阿呆者とを取つ違へたこたあなかつた。おらあ屹度駄目になつちやつたんだらう。

後家のクイン

お前の頭にや龜裂が入つてるんだから、そりやあたり前だよ。

マホン

ぢや俺も從奴も酒のせいだ。まだ三週間とは經つめえ。おらありメリツクの若い娘つ子たちと、宵から夜明まで身體のきかなくなる程飲み續けたこたああるが、まだ一度も氣がふれたことはねえんだ。（突然後家のクインに）俺らが顔はどうかなつてるかい。

後家のクイン

あゝ、變だよ。お前がくすく笑つて許りゐる狂人だつていふことは、三つ子にだつてよく分るよ。

マホン（前よりも一層元氣よく立ち上がつて）

そんなら俺あそこらの施療病院にでも行かう。そこぢや俺を悦んで入れて呉れるだらう。（大得意で）おりや恐しい病人だ。だから何時だつたか俺あ窮屈な胴衣を着、七人のお醫者様に俺が言ふことを本に書かせながら、喚き叫んだことがあつたつて。お前はそれをふんどだと思ふか。

後家のクイン

若しもお前がえらがる積なら、早く行つた方がいゝよ。何時だつたか、若い衆たちが狂人を捕へてあんまり皆なで石を投げたので、その狂人は到頭怒つちまひ泡をふいて逃げ出して、海に溺れて死んぢまつたことがあつたつて。

マホン（諦めて）

ほんとに人間てえものは、頭が變になると悪魔になるもんだ。さあ、おらを出してくれ。さうすりやおらあそつと抜路から抜け出して、あの連中には會はねえやうにする。

後家のクイン（外へ案内する）

それが好いよ。右の方に向つておいで。誰にも會はないで済むから。

マホン起り去る。

ファイリイ（賢きうに）

後家のクイン、お前は何か企たくらんでるんだな。よし、俺ああの男の後を追つ駈けてつて、飯を食はせて休ましてやらう。さうしたら彼奴が気が狂つてるか、お前のやうに正氣なのかどこの俺に分るだらう。

後家のクイン（困つて）

あの男の側へ行くんなら、自分の頭を氣をつけるがいよ。是まで度々あの男が氣が變になつたつていふことを、お前はあの男から聞かなかつたかい。

ファイリイ

俺あ彼奴から色んな話を聞いたよ。さうさね、日の暮れねえ中に面白い芝居が始まるだらうと俺あ思ふね。

ファイリイ出て行く。

ジミイ

ふん、ファイリイは一人天狗の馬鹿者だ。どうして彼奴が頭の鉢を割られて正氣であられるもんか。おらあ奴等の後を追つ駈けてつて、あの狂人がファイリイに向つて行く所を見物しやう。

ジミイ出て行く。後家のクインは密造酒を振揚の後へ隠す。やがて家の外が騒がしくなる。

群衆

そら来た。跳びつぐらの名人。駈けつぐらの名人。好い若え衆だ。敏捷はしどい奴だ。そらついてけ。

クリスチイ騎手の服装にて、ベギーン、マイク、セーラ、その他の娘、及び男たちと一緒に登場

ベギーン（積集に）

さあもうこの人の邪魔をしないで行つとくれ。この人は汗びつしよりになつてるんだからね。ほんとに行つとくれ。そしてこの人が汗を乾かせる間、綱曳でもやつてよおくれ。

群衆

さあ、褒美をおくぜ。風笛と。この胡弓ゴウキウは昔或る詩人が弾いたんだ。それからこの平つたい、三つも節こぶのあるりんぼくの杖は、ダブリンの市いちから學生さんを叩き出しさうな代物しろものだ。

クリスチイ（人々から賞品を受取つて）

みなさん、有難う。だがこないだおらが一撃ひとうちげ打つくらしてゐる所をみんなが見たら、今日おらがしたことなんざあ、詰らねえこつたと言ひなさるだらう。

村の口上いひ（外にて鈴を鳴らしながら）

東西々々、本日の最終の番組といたしまして、下の草原で綱曳をいたします。さあ〜どなたも御出で下さい。メイオウの衆のお手柄を願ひます。

ベギーン

さあ、行つとくれ。そしてこの人を休ませ、汗を乾かせてやつておくれ。ほんとうに行つとくれつたら。もうこの人はこれつきり何にもしやしないんだよ。

ペギーンは人々を推し出す。後家のクインは人々の後をついて行く。

人々(出て行きながら)

ぢやあ行かう。一先づ左様ならだ。

ペギーン(自分の肩掛でクリスチイの顔を拭いてやり、にこ／＼しながら)

ほんとにお前は好い若い衆だねえ。こんな澤山褒美を貰つたんだから、お前は今日からは威張れるよ。まあ、お前は眞晝間の暑さでえらく汗をかいてるね。

クリスチイ(嬉しそうに彼女を眺める)

若しも俺が、今欲しいと望んでる最後の賞品を得られりや大得意だ。そりや外でもねえ。御允許が出たら二週間以内に、お前が俺と夫婦になつて呉れるつていふ約束をして呉れることだ。

ペギーン(彼のところより後退りをする)

そんなことをあたしに言ひ出すなんて、お前も豪勢だねえ。みながさう言つてるよ。もう四ヶ月か五ヶ月も経つて、お前のおやぢさんが腐つちまふ頃になれば、お前は生れ故郷の何處かの女の許に行つちまふだらうつてね。

クリスチイ(憤然と)

お前を離れてかい。(彼女にすり寄り寄る)俺あ決して何處へも行きやあしねえよ。四五ヶ月経つて氣候が温になる頃にや、夜露に濡れながら、お前と俺とはナイフィン川のあたりを歩いてるだらう。その時分になりや好い匂をたゞよふし、小つちやなびか／＼した三日月様が、山に沈んで行くのが見えるだらう。

ペギーン(椰揄ふやうに彼を見る)

クリスチイ、マホン、それぢやお前は日が暮れたら、ナイフィン川の河べりで、密獵者の戀の眞似でもする積なのかい。

クリスチイ

俺の兩腕がお前を抱きしめ、お前のすぼめた唇に澤山の接吻を押しつけりや、俺の戀が密獵者の戀だらうが、伯爵の戀だらうが、そんなことあどうでも宜からう。そうして若しもさうなつたら、昔も今も一人ほつちで、金の椅子に淋しさうに坐つてゐらつしやる神様を、氣の毒に思ふやうになるだらう。

ペギーン

ほんとに面白いだらうね。クリスチイ、マホン。だが娘つ子たちがどんなに願つたつて、お前のや

うに口の旨い話の上手な若い衆に會ふのはむづかしいよ。

クリスチイ（得意になつて）

まあ待ちねえ。二人でエリスあたりで路に迷ひ、受苦グロッド日の時分そこらの井戸から水を飲むとするんだ。そして濡れた唇で熱いキッスをしたり、草花の中に首んとこまで埋まつてお前が仰向けに寝ころがり、日向ほつこをしながら俺の話の話を聞くんだ。

ベギーン（彼の言葉に動かされて、低い聲で）

さうしたらあたしは美しく見えるかしら。

クリスチイ（有頂天になつて）

若しも法冠をつけた僧正さんたちがそんな時にお前を見たら、黄金色の肩掛に花束をつけて、外をあつちこつち歩いてる、トロイのヘレン姫を極樂の横木を曲けて、すきみした聖い豫言者のやうに、お前をすきみするだらう。

ベギーン（心から優しく）

だけどクリスチイ、マホン、あたしや詩人のやうに話上手な、勇ましい心を持つたお前を喜ばすに、適したものを何も持つてやしないよ。

クリスチイ（低い聲で）

お前獨りの心の中にや、七つの天の光明があるんだ。是からお前は俺のために、おらが眞暗闇に外に出てオーエンやカロモアで鮭ほらを突く時、天人の燈明でおらを照してしてくれるだらうな。

ベギーン

クリスチイ、マホン、若しもあたしがお前の女房だつたら、さうゆう晩にやあたしもお前と一緒に行くよ。さうすりや、あたしがお役人を騙だまがすことや、お星様に可笑めだしな緯名なをつけるのが上手だつていふことが、お前にも分るだらう。

クリスチイ

お前も一緒に行くつて？ お前は雹あられにあつたり、明方の霧に包まれたりすりや死んぢまふよ。

ベギーン

お前とあたしとなら、どんな狭い藪やぶにだつてやすくと隠かくれられるよ。（怖しく不安げに）だけどお前みたいな立派な若い衆にゐるて貰ふには、こんな貧乏むかつたい藁屋わらやちや駄目だから、あたし達は話しかけかも知れないね。

クリスチイ（彼女を腕に抱いて）

若しも俺が基督様の信者でねえなら、お前んとこの屋根の一本一本の藁わらにも、又お前んとこの入口の小徑こみちに敷いてある石つころの一つ一つにも、おらあ土下坐してお祈りを上げてえ位えだ。

ペギーン（たこくして）

若しもほんとにさうなら、あたしや今日から奇蹟をなさつた神様にお蠟燭を上げやう。神様はお前を南の國からこゝまで遣したんだし、又あたしに著物をちやんと買つておかして、一寸も待たずに何時でもお前と夫婦になれるやうにして下すつたんだからね。

クリスチイ

奇蹟だつて？ それに違ひねえ。俺あこの嬉しい日が段々に近づいて来るのを少しも知らねえで長いこと向ふで働き、長いこと歩いて来たんだ。

ペギーン

そりや小娘のあたしにも、黄金の樽を十も持つてる猶太人と結婚しに、海を越えて行くやうにつて人にすゝめられたことが幾度あつたか知れないよ。だけど神様の星のやうに、お前のやうな人が段々に近寄つて来るのを、あたしや夢にも知らなかつたよ。

クリスチイ

考へて見りや、女たちがそんな話を下らない野郎に話してゐるのを、俺あ長い年月聞いたんだ。だがお前のやうな甘つたるい聲で、俺の悦ぶやうなこといふのを聞くなあ今日が始めてだ。

ペギーン

ねえ、クリスチイ、マホン、毒口をたゞくんでこの國中のものに怖れられてるこのあたしが、甘いことを言ふんだからね。あゝ、ほんとに人の心ついていふものは不思議なもんだねえ。だけど今日からはこのメイオウの土地にや、あたし達のやうな洒落た戀中は又とあるまいよ。（酔ひしれた唄の聲家の外に聞ゆ）うちのお父つあんがお通夜から歸つて来たんだよ。お父つあんが一寢入りしてから又話さう。一寢入りしたあとなら、うちのお父つあんはおとなしいからね。

二人は離れる。

マイケル（戸の外で歌ふ）

牢屋の番人が、

すぐとわしらを捕らまへて

ケベンの市にもう一度

繩つきのまゝ連れてつた。

シヨオンに扶けられてマイケル入り来る。

ふんぢばられた俺たちは

泣く泣く牢屋に寝てしもた。

マイケル、クリスチイを見る。そして側に行つて酔拂ひらしく彼と握手をする。その間ベギーンとシヨオンとは左手で話し合ふ。

マイケル（クリスチイに）

あにさん、先づお目出度う。お前が下の砂つ原で、どの競争にもみんな勝つたつていふことをわしやあ聞いたよ、そんでわしやお前のやうな立派な頑丈な若い衆を、ケート、カシデさんとこのお通夜に、一緒に連れてかなかつたことが恥しくつてなんなんだ。なぜつてあんなに酒のたんとあのお通夜は又とあるめえ。なにしろ午ひるになつて、愈々小つちやな墓に婆さんの骨を埋める段取になると、五人の男が、ぢやねえ六人の男が、墓の石の上に反土へつを吐き、口がきけなくなつてぶつ例れつちまつたんだからなあ。

クリスチイ（ベギーンの方に氣を配りながら、不安げに）

ほんとかい？

マイケル

ほんとだとも。だがお前は、可哀さうなおやぢさんを人に内證で埋めつちまふなんて、へまなことをやつたぢやねえか。昔のお聖者様のヨセフ様のやうな鹽梅あんばい式しきに、おやぢどんをケリイ馬の尻しりに載のつけてこの西の國に連れて來りや、俺達で立派に葬式を出してやり、遠くで腐らせやしなかつたに

なあ。遠くで腐つちまつたんぢや、誰もおやぢどんの御生を願ふお通夜の酒を、飲んでやるものがねえぢやねえか。

クリスチイ（ぶつきら棒に）

あんな奴はあゝやつて埋めときや澤山だ。

マイケル（クリスチイの背中を叩いて）

やれ／＼お前は何ていふ情知らずの人殺し野郎だらう。お前が女房を嗅かぎあてた家の男は災難だなあ。だが、（シヨオン、キヨウウを指差して）娘の婿むこに俺が選んだあの含羞はにかみやの、お上品な男を見てやつてくれた。俺あ今日二人を夫婦にする。金びかのお許し狀を貰つて來たんだ。

クリスチイ

それぢや今日二人を結婚させるんか。

マイケル（ふんぞり返つて）

さうよ。俺がどんなにへべれけに酔つたつて、自分の娘を獨身で、お前みたいな惡戯わるなげをする亂暴者と一緒に置いとくと、お前はわしを思ふのか。

ベギーン（シヨオンから逃げる）

お許しが來たつてほんとなの。

マイケル

ライリー和尚様が七面倒くせえラテン語で読んでくれて、「先づ間に合つて宜かつた。わしは大急ぎで結婚させてやらう。あの若い男が邪魔に入ると大變だから」つて言ひなすつた。

ペギーン

和尚様が時をお間違へになつたんだよ。あたしがこれから一緒にならうつていふのはこの人——このクリスチイ、マホンだよ。

マイケル（喫驚し、大聲で）

お前はこの男をわしの息子にする氣か。おやぢの血で身體を濡らし、そのまゝ乾し固めた此奴を。

ペギーン

さうだよ。シヨオンちゃんやんのやうな勇氣もなければ話も下手な、まるで案山子みたいな人と一緒になるのは、女の身には辛いことぢやないかね。

マイケル（喘ぎ、そして椅子を落ち込んで）

あゝ、俺が度外れに酒を飲んでへべれけになつてる時に、俺が心臓をかきむしらうとするなんて、手前も親不孝な娘だなあ。手前のお蔭で奴等がかれこれ言つてきたら、俺あ夜の明ける迄胸の中に風を吹きつ通して怒鳴つてゐなくつちやなるめえ。シヨオン、お前何とかよい智慧はねえか。ちつ

とも焼餅を焼く氣はねえんか。

シヨオン（ひどく悲觀して）

おらあおやぢを殺した男を嫉くのは怖いや。

ペギーン

ほんとにお前なんぞと夫婦になつたらたまらないね。母のない子には色んな危ないことがあるんだよ。だからあたしやこの人が西からか南からか歩いてやつて来る前に、お前と夫婦にならなくつてほんとに好いことをしたよ。

シヨオン

天下の往來から、うす汚ねえ宿なし野郎を拾ひ上げるなんて可笑しな話さ。

ペギーン（揶揄ふやうに）

ぢやお前は春の日のお天氣の好い日曜日、女と一緒にぶらぶらするのは相應しい色男だと思つてるのかい。そんな時にやお前は連れの女に百合の花や、薔薇の花の話をする代りに、牛の肝臓の話でもするだらう。

シヨオン

ぢやお前は俺がお前を深く思つてゐるつていふことも、有難いお許しのことも、土産にしやうつて

いふ澤山の牝犢や、金の指環のことも考へてみちやくれねえんか。

ペギーン

キラキインのシヨオン、キョーウちゃん、お前はあたしにや勿體なすぎるよ。だからお前はミースの平野に澤山の牛を持ち、バロのお母さんのダイアモンドでばく飾り立てよる、美しい娘さんをめつけにお出でよ、シヨオンちゃん、そんな女がお前には好い配遇なんだよ。さあ、それぢや御機嫌やう。(ペギーン、クリスチイの後に引つ込む)

シヨオン

聞いてくれねえのか。その俺の……

クリスチイ(怖しい權幕で)

兄さん、引つ込でたがいよぜ。そんでねえと俺あ今日も又、人殺しをやるかも知んねえよ。

マイケル(叫聲を立て、跳び上がる)

人殺しだど？ お前は氣がふれてるんか。今夜の御馳走の並んでるこゝで、人殺しをやうつていふんか。喧嘩がしたけりや波打際に出てけ。波打際なら潮が上げてくりや、どんな痕跡だつて人に目にふれねえやうに洗ひ流しつちまふだらう。

シヨオンをクリスチイの方に押しやる。

シヨオン(身を振放し、マイケルの後にかくれる)

マイケルさん、俺あんな奴と喧嘩はやんねえ。何處から降つて来たか分らねえやうなあんな畜生と喧嘩をする位なら、おらあ死ぬ迄思ひ焦れて獨身で暮すよ。マイケルさん、お前自分でかゝつて見な。そんでなきお前は俺の牝犢だの、スニームの青牛だのを損することになるぜ。

マイケル

この俺に、育れつつきおやぢ殺しに出来上つてる彼奴と、喧嘩をやれつていふのか。(シヨオンを押し出す) それ、いゝか。馬鹿だな、やつつけつちまへよ。

シヨオン(少し進み出る)

素手で打たうか？

マイケル

お前の後にある鋤を取んな。

シヨオン

おらあそれで打つと、絞罪になるのが怖しいや。

クリスチイ(鋤を取り上げる)

ぢや俺がお前を絞罪にしてやらう。それが嫌ならこゝから出てけ。(シヨオン戸口から逃げ去る)

クリスチ

こんであばよだ。(マイケルの側に行き、言葉巧みに)お前さんもあんな意氣地のねえ野郎を、自分の家へ置いときたかあねえだらう。さあ、どうか承知して、あの娘が俺と口約束をするのを聞いてくんな。おらあ好運の星の潮時に乗り合はしてるんだから、こゝの家に俺をおいときやあ好みことがあるぜ。

ベギーン(マイケルの他の側に立つて)

さあ、承知しておくれ。あたしやこの人と夫婦になるつて、そして決して後悔しないつて神様に誓つたんだからね。

マイケル(真中に立ち、雙方につかまりながら)

人間が樂な死にやうをするのも、苦しい死にやうをするのも、そりや神の御心だとわしは思ふよ。それから澤山の子孫をこの世に生み殖すのも、神の御心だとわしや思ふよ。獨身で、岩の上をうろくしながら吼えてる年をとつた驢馬みてえに自分の家つていふものがなくつて、あつちの家で貰つちや食ひ、こつちの家で貰つちや飲んでたらどうなるべえ。(クリスチに)世間の奴等は何時不意に殺されるか知れねえつて、お前みてえなものを家に引き入れるのを恐れるかも知れねえが、俺あ愛蘭の男一疋だ。俺あ何時でも喜んで死ぬことが出来るんだ。お前がシヨオン、キョーウと夫婦

なり、かほせえ弱蟲を産み出して俺の床のまはりを賑かにしてくれるよりや、小つちやな、勇ましい、あくたれつ子の孫を、うんと育て、俺に見せてくんな。(二人の手を握手させる)強い男は天下の寶だ。おやぢの腦天をたつた一打でぶち割つた男には、十人ぶりの勇氣があるわけだ。神様、聖バトリック様、聖マリア様、この二人が祝福され、今日から繁盛いたしますやうに。

クリスチとベギーン

アーメン

家の外に騒ぎが起る。老マホン駈け込む。群集及び後家のクイン續いて入り来る。老マホン、クリスチイに突つかゝり、彼をうち倒し、彼を打ち始める。

ベギーン(マホンの腕を抑へて)

これさ、お待ち。お前は一體何者だい。

マホン

こいつの親父だ。あゝ。

ベギーン(後退りをして)

生きつ返つたのかい。

マホン

お前は勦でこつゝと一つ軽く叩かれた位で、この俺が容易くおつ死ぬと思ふんか、(再びクリスチイを打つ)

ベギーン (クリスチイを睨みつけて)

ぢやお前は何にもしない癖に、おやぢさんを打ち割つたなんて嘘をついたんだね。

クリスチイ (マホン杖を抑へて)

こりや俺の親父ぢやあねえ。こいつあ世の中を騒がせる大氣違だ。(後家のクインを指さして) それに違ひねえつて云ふことをあの人はよく知つてるよ。

群集

貴様はベギーンを瞞すんだな。後家のクインが今日この男を見たつていふことを、お前は知つてたんだらう。この嘘つきめ。

クリスチイ (呆然として)

こいつこそ嘘つきだ。頭をぶち割られ、倒れて死んだふりをしやがるなんて。

マホン

おらあ手前が俺に手向ひしたんでぶつ魂消てると、俺が呼吸もつかねえうちに、手前は山を駆け下りて逃げたんぢやねえか。

ベギーン

ぢやあたし達は、こいつが軽く一撃打つただけで、外に何にもしないで冷汗をかくて北の方に逃げて来たのを、えらものにしちやつたんだね。

クリスチイ (哀れつぽく)

お前は今日俺がしたことを見たぢやねえか。だから俺をこの老翁の手から救つてくん。よ、なにもそんなに泡を食つて、この俺をおつほり出さなくつてもいゝぢやねえか。

ベギーン

そりやお前の不實のせいだよ。三十分ばかり前に、あたしが心からお前のことを思つてゐたかと思ふと、あたしや情なくなるよ。(マホンに)あたしやマニスタから来た、大嘘つきの馬鹿者に夢中になつてる所を世間の人に見られるのが嫌だから、こいつを此處から連れ出しておくれ。

マホン

罰をあてゝ呉れるから、さあ立つて俺と一緒に来う。

群集 (嘲つて)

鬼息子だ、メイオウの仲間の首領になる若い衆かと思はれたになあ。をぢさん、たんと虐めてやんなよ。

クリスチイ（おどくしながら立ち上がり）

なんで手前達は俺を苦しめるんだ。若しもあのたつた一打の他に俺に人を傷けたことがあつたら、俺あ雷に打たれて碎かれてもいいよ。

マホン（大聲で）

若しもやつたことが無えつて云ふんなら、手前はやくざ野郎だ。いゝか、この世の罪惡はみんな手前みてえな奴がやるんだ。

クリスチイ（兩手を上げて）

神様の御名にかけて……

マホン

神様を引き合になんか出すんでねえ。それとも神様に頼んで、早魃かんぱつだの、熱病だの、流行病だの、コレラだのを下ろして貰ふ積なんか。

クリスチイ（後家のクインに）

お前仲に入つて俺を助けてくんなあ。

後家のクイン

あたしや随分と骨を折つたんだよ。けどももうこうなつちや何うにもならないね。

クリスチイ（絶望してあたりを見廻はす）

ぢやおらあもう一度あの責苦の中へ歸るんか。そんでなきや八月の埃ほこりで咽喉のどに塊を拵へたり、三月の風に吹かれて肋骨を笛みてえにヒユウ／＼いはせながら、國中を宿なしものゝやうにほつ／＼き廻つて、逃げ歩かなくつちやならねえんか。

セーラ

ベギちやんに助けてお貰ひよ。あんな人はよく氣が變るからね。

クリスチイ

俺あ嫌だ。キイルの草つ原に南を向いて立つたら、眞夜中のお月様もあれに會ふのを誇るやうな、あれの美しさも今は苦しみの種だからなあ。あゝ、俺あ這ひづり出て、あの燃えるやうな眼でこの俺の心を焼いて仕舞いてえ。

ベギーン（泣き出したいのを堪え、マホンに向つて烈しく）

こいつを此處から連れ出しておくれ。そんでないとあたしや若い衆に頼んで、びどい目にあはせるよ。

マホン（クリスチイの側に行き、杖を振りながら）

此處の若い衆なぐに殴られるのが嫌なら、さあ来こう。

ベギーン（泣き笑をしながら）

さうだよ。醜い嘘つき野郎がえらいものゝ真似をすりやあ、人さんにえらい目にあふよ。

クリスチイ（マホンに向つて非常に鋭く）

放さねえか。

群集

さうだ。クリスチイ、しつかり。あの二人が打ち合ひをおつ始めたら、世界中をひつくり返すだらう。

マホン（クリスチイに掴みかゝる）

来いといつたら。

クリスチイ（前よりも感傷的に）

えゝ、放せ。

マホン

手前の足が跛になり、手前の背中が眞青になつたら放さねえこともねえ。

群集

両方とも、しつかり。俺あ爺さんの味方だ、にいさん、しつかり。

クリスチイ（低い感激した調子で）

騒ぐなあ止めねえか。手前たちは今日たつた一つの嘘でこの俺をえらものにしてくれたが、今度は又獨りほつちでゐるなあみぢめだが、世間の馬鹿者と一緒にゐるなあもつと悪いつていふことを俺に教へてくれた。

マホン、クリスチイに近寄る。

クリスチイ（殆んど叫ぶが如く）

退かねえか……そんでねえと、俺あ雲の上の守護の天使たちを瞬きさせるやうな打方を、手前たちに見せるぞ。

クリスチイ不意に素早く向き變はり、鋤を拾ひ上げる。

群集（半ば恐れ、半ば興じて）

あいつあ氣が違つたぞ。みんな用心しろ。馬鹿に構ふな。

クリスチイ

俺が馬鹿かな。俺あ今日都會の詩人の前髪をおつ立たせるやうな甘いことを言つたぢやねえか。俺あお前たちの駈けつくらにも、飛びつくらにも勝つたぞ。それから……

マホン

無駄口をたゞかすと俺と一緒に来う。

クリスチイ

行くとも。だがおらあ先づ手前をぶつ倒してくれろぞ。

クリスチイ鋤を取つてマホンに跳びかかり、マホンを戸の外に追ひ出す。群集及び後家のクイン續いて出て行く。戸外に大騒動あり。次いで喚き叫ぶ聲聞ゆ。それから暫く死の如き沈黙。クリスチイ半ば目眩みて入り来る。そして火の側に行く。

後家のクイン（大急ぎで入り来り、彼の側に行く）

みながお前に向つて来るよ。さあ、お逃げ。ぐずぐずしてるとほんとにお前絞罪になるよ。

クリスチイ

こうなりや俺あベギーンが前と同じやうに褒めて呉れるだらうと思ふよ。

後家のクイン（じれつたさうに）

裏口からお出で。あたしや絞首臺の上で、お前に息を引きとらせるのが可哀さうでならないんだよ。

クリスチイ（怒つて）

嫌なこつた。ベギーンと別れたら、俺の一生は何が面白からう。

後家のクイン

お出でといつたらさ。此處を出たつてお前昨夜と同じ身の上ぢやないかね。今度は二重の人殺を、女たちに聞かせて歩いたらいゝだらう。

クリスチイ

おらあベギーンの側は離れねえ。

後家のクイン（じれつたさうに）

ビンガムの町からミイスの原まで、どんな村の居酒屋にだつてあれ位の娘はゐるぢやないかね。さあ、お出で。あたしやお前にもつとすつといゝ戀人を、月の變り目毎に世話をして上げるよ。

クリスチイ

俺が思つてゐるのはベギーンばかりだ。お前が選り抜きの女を大勢連れて来て、肌衣一枚でこゝから東の國まで並べた所で俺あ用はねえ。

セーラ（下著を一枚脱ぎ、駆け入る）

みんながこの人を絞罪にする氣らしいよ。（下著と肩掛を差し出す）これを著せて、東の方へ逃しておくれ。

後家のクイン

さあ、あれは氣が狂つてゐるよ。だけどあたし達二人、それを著させ、あたしが渡まで連れてつて、

アキル行の小船にのせてやらう。

クリスチイ（力なく争ふ）

放つといってくれ。俺あ今日の自分の幸福しやあせを考へてるんだから。屹度あの女は女房になつて呉れるだらう。そして俺は矢張り折紙つきの英雄えらものなんだ。

二人は下着を彼に著けさせやうとする。

後家のクイン

この人の左の足をお捉つかまへ。二人で引張つて行かう。さあ、お出で。にいさん。

クリスチイ（不意に立上がった）

あの女から俺を引離さうつていふのか。あの女と俺とが夫婦になるのをお前たちは妬やくんか。さつさと行つちまへ。

クリスチイ腰掛を取上げて兩人を威す。

後家のクイン（立去りながら）

この人は牢屋へ入れるより、狂人病院に入れる方がいゝよ。あたし達は裏口から行つてお醫者さんせんを呼んできて、この人を助けてやらう。

後家のクイン、セーラを伴ひ、奥の部屋を通つて出て行く。群集は戸口に群る。クリスチイ再び火の側

に腰をかける。

マイケル（怖しきうに囁く）

爺さんはほんとに殺されたんか。

ファイリイ

最後の息を引き取る所を俺あ確に聞いた。

一同クリスチイを窺ふ。

マイケル（繩をもつて）

あの様子を見な。絞罪くわひにする役人がやるやうに輪を拵へといて、彼奴が油断してゐる所を、あれの頭にすつほりかけるがいゝ。

ファイリイ

シヨオン、お前やんなこゝにゐる人間の中ぢや、お前が一番正氣しやうきらしいからな。

シヨオン

おらが側へ行くんか。あれは俺を一番憎にくんでるんぢやねえか、ベギーン、お前やれよ。

ベギーン

それぢやお出で。

ベギーン他の連中と進み行く。一同クリスチイの頭に輪をかける。

クリスチイ

何をしやがるんだ。

シヨオン（皆がクリスチイの腕に、固く繩を結びつけたので勝誇つて）

巡査の所へ来い。お前ももう住生するんだぞ。

クリスチイ

俺がか。

マイケル

若しも俺たちがお前を憐れんだら、神様は今日俺たちに政府の罰をおあてになるだらう。だからお前も氣持よく行つてくれ。絞罪は樂な、手つ取り早い死方だからな。

クリスチイ

俺あ動かね。（えベギーンに）今度はみんなの見てゐる前でやつつけたんだ。お前はあれを何う思ふ。

ベギーン

知らない人は大きな法螺を聞きや喫驚するさ。だけど背戸で喧嘩をしたり、鋤で打合ひをしたりする所を見ると、勇しい話と賤しい行とは、大變な違があるつていふことが分つたよ。（一同に）こゝ

から追ん出してお呉れ。そんでないとあたし達は大勢、今日此奴が爲たことで調べられるかも知れないよ。

クリスチイ（恐怖にかられた聲で）

ぢや手の皮の固くなつた絞罪吏に、血だらけな滑結を俺の耳の根つ子にひっかけさせる爲、お前は俺を送り出すんか。

人々（繩を引張る）

さあ、來ねえか。

クリスチイ床の上に引き倒される。

クリスチイ（ティアルに足を巻きつける）

ベギーン、繩を切つて呉れ。さうすりや俺はお前たちとこから出て行つて、今日からはキールの狂人みてえに、濕糞だの、崖の縁に生えてる青い草だのを食べて暮すよ。

ベギーン

さうしてお前のやうな憎らしい嘘つき野郎のために、あたし達が絞罪になるのかえ。（一同に）こゝから連れ出してお呉れ。

シヨオン

首根つ子の結びを引張つて、うんと彼奴をしめて呉れ。

ファイリイ

お前自分で締めるがいゝや。食ひつかれねえやうに離れてかゝりや、彼奴あお前をどうすることも出来やあしねえ。

シヨオン

おらあ彼奴が怖ねえや。(ベギーンに)眞赤におこつてる泥炭を一塊持つて来て、彼奴の足を焼いてやつて呉れ。

ベギーン(輔で火を吹きおこす)

さあ、にいさん、お放しよ。それでないと向脛を焼くよ。

ファイリイ

俺を責めやうつて火を吹いてるんか。(聲が高くなり、強くなる)お前たちはそんな奴等か。そんならみんな用心しろ。どうせ絞罪になるんなら賑かに送つて貰はう。それから死ぬ前に、お前たちの中の誰かの血をも流してやらう。

シヨオン(驚いて)

ファイリイ、しつかり持つてゝくんな。いゝかい、頼むよ。屹度彼奴はこの俺に復讐しやうつていふ

んだらう。

クリスチイ(殆んど愉快さうに)

若しも俺が手前を捕へたら、晩方にや手前は地獄の鳥を威かす案山子のやうに、首を締められてぶら下がつてゐるだらう。あゝ、手前は俺が親父の幽霊と一緒に、地獄の國境ひでも通つて怖い旅を續けるがいゝや。

シヨオン(ベギーンに)

早くやんねえか。あゝ、ライリイ和尚様が、酒を飲むなあ罪だと言ひなさつたが、眞理だなあ。お前たちはみんな今ひよろしくし、ふらくししてゐるぢやねえか。

クリスチイ

若しも俺が、手前たちの中の誰かの首を締めつけたら、俺あ裁判所のびくくしてゐる陪審官達の前で、立派に裁判を受けてみせるぞ。おらが縄で絞られる日にや、メイオワの土地のものはみんな泣いて呉れるだらう。絹や繻子の著物を著た奥さん衆が、レースのハンケチで涙を拭いて、怖い俺の死を詩や歌を作つてくれるだらう。

クリスチイ床の上をのたうち、シヨンの足を咬む。

シヨオン(叫ぶ)

足を咬まれたあ。狂犬みてえな奴だから、おらあ屹度死んぢまふだらう。

クリスチイ(自分のしたことに満足して)

おう、おつ死ぬだらう。さうしたら、二三週間の後にや俺も行くから、地獄の旗を振つて俺を迎ひに来てくれ。悪魔だつてケリイや、メイオウの者で、親を殺した奴をさう澤山は知るめいからな。

老マホン後の方から四つん這になつて入り来り、見つからずに様子を見てゐる。

人々(ベギーンに)

お前火を持つて来な。

ベギーン(近づく)

さあ、觀念おし。(彼の足を焼く)

クリスチイ(蹴つたり、叫んだりする)

あゝ、助けて呉れ。

クリスチイ蹴つてティアルから離れる。そこで皆は彼を戸口の方に曳きづゝて行く。

ジミイ(老マホンを見て)

みんな見な。なんだか入つて来たぞ。

一同クリスチイを手放し、左手に逃げる。

クリスチイ(膝を立て、老マホンと顔を合はせる)

三度殺されにやつて来たのか。それとも何か用があるんか。

マホン

奴等は何でお前を縛つたんだ。

クリスチイ

俺がお前をぶつ殺したんで、巡査の所へ俺を引張つてつて、絞罪にしやうつていふとこだ。

マイケル(言譯するやうに)

危ねえ法律の手から、自分たちの小ちやな家を守つて行くのが神様の御心なんだ。わしが落魄れたり、絞罪になつたら、わしの娘は何うするだらう。

マホン(クリスチイの繩を解きながら、にがり切つて)

お前がああ娘の背中に袋を背負はせて、死ぬまで赤貝を拾ひに出やうが俺あ構はねえ。だがおらとおらの倅は、俺たちの好きな所に勝手に行く。そして是からあメイオウの悪黨共と、こゝの馬鹿者共の話聞かせるで面白からう。(繩の解かれたクリスチイに)さあ、来う。

クリスチイ

お前と行くんか。ぢや、野蠻人の奴隷を連れられた大將のやうに俺あ行かう。さあ、来い。今日からは

どんな喧嘩も俺の勝だから、俺はお前に飯の煮焚をさせたり、鋤を洗はせたりしてやる。(マホンを押出して) 来いと言つてゐるに。

マホン

俺に言つてゐるか。

クリスチイ

ぐづぐづ言はずにさあ来い。

マホン(出て行きながら振り返り、肩越にクリスチイを見る)

素敵だなあ。(ニヤリと笑ふ)俺あ又氣が狂つた。(行く)

クリスチイ

お前たちのお蔭で、俺もどうやら一人前の野郎になれたから、俺あこゝの衆に千萬遍もお禮を言ふよ。俺あ今日からは死ぬまで、面白可笑しく陽氣に暮すんだ。

出て行く

マイケル

あゝ、有難てえ。これで安心して酒が飲める。ベギーン、お前ビールを抜かねえか。

シヨオン(彼に近寄る)

ライリイ和尚さんが元通り二人を夫婦いっしょにしてくれ、彼奴の毒々しい咬傷が治つて、心配事が悉皆失すつかりくなりや奇蹟だ。

ベギーン(シヨオンの耳を平手で打ち)

あたしの目に觸れない所へ行つてお呉れ。(肩掛を頭から被り、歎き悲む)あゝ、何うしやう。あたしやほんとにあの人を逃しちやつた。あたしやこの西の國一番の鬼息子を逃しちやつた。

(幕)

嘆きのデアダア

登場人物

ラバーハム	デアダアの乳母
老婆	ラバーハムの召使
オーウエン	コンチユバーの従者にして且間諜
コンチユバー	アルスターの王
フアーガス	コンチユバーの友
デアダア	
ナイシ	デアダアの戀人
エンリ	
アーダン	ナイシの弟
二人の兵士	

場 所——

第一幕 スリープ、フアドのラバーハム家。
 第二幕 アルバン。初冬の早朝。ディアダアとナイシの天幕の外側。
 第三幕 エメン、マチヤ下手の天幕。

第一幕

スリープ、フアドにあるラバーハムの家。左手に奥の室に通ずる戸口があり、それから右手にも外に通ずる戸口がある。背面には窓があり、またやりかけの掛毛氈の枠がある。それから又大きな戸棚と重さうな櫃の箱とが後の壁近くにある。住居は整頓され、さつぱりとはしてゐるが、飾り氣がない。ラバーハム(五十才位の女)が掛毛氈の枠の所で働いてゐる。老婆が左手から入つて来る。

老婆

もう夜になるのにまだお歸りになりませぬか。

ラバーハム

まだだよ。……(心配を押しかくしながら)西や南から雲がやつて来たので暗いので、いつもよか遅くはないでせう。

老婆

たしかに遅うござります。ウスナの息子、ナイシ兄弟が満月になつてからこつち二三日、上で兎を逐ふてゐるとのこととござります。

ラバーハム(益々氣遣はしげに)

どうかナイシ兄弟がお姫様を見ませんやうに。——(仕方がないといったやうな身振りをして)けれど若しか見たつてあたしの考へで呼んだのぢやなし、また追ひ拂ふことも出来やしない。

老婆(なじつて)

成長なされたら女王様におなりになる身ですもの、あなた様がお止めするのが當り前でござりませう。

ラバーハム

氣儘に育つたお姫様をどうしてお止め出来ませう。老王様がお姫様をお迎へなされる時に禍が起るといふ豫言を、お姫様はまるで無いものゝやうに楽しんでゐます。そして自分の美しさと丘をさまよふことの外には、何のお考へもないのです。

老婆

あたし達は情なうござります。……可成りのお年を召されたコンチュバー様と御一緒におなりになるのを、お姫様はお悲しみなさいませう。どうゆうわけで王様がお姫様をお手馴けにおなりになる

のに、こんな寂しい場所にお押込めになり、御食物に御我慢のないお姫様のお食事をわたし達に料理させるのか、わたくしには一向解せません。(外を見る)

ラバーハム

お姫様は谷からお出でになるやうかい。

老婆

いゝえ。シッシーはりえにしだの所を二人の男が——(叫ぶ)コンチユバー様とお伴のファーガス様
が通つておられます。お姫様がいらつしやらないので、コンチユバー様は今夜は心配なさいませう。
せう。

ラバーハム(忙しげに室を片づける)

すぐ近くに來られたのかい。

老婆

流れを渡つておられます。それから又お姫様が薪を背負はれて丘をお出でになりました。一寸駈けて行つて二人のお目に留まらぬうちに、お姫様に身繕ひをおさせ申しませうか？

ラバーハム

いゝよ。鷹がお姫様とお太陽様の間を飛んでも嫉妬する人だもの、どうしてお前に見させるものか

ね。(外を見る) 爐の傍へ行つて忙しくて二人を見なかつたやうな風をしておいで。

老婆(器を磨くために坐る)

今夜は面倒が起るに相違ありません。歩き方手のふり方からお察しますと、王様は疳を起していらつしやるに違ひありません。

ラバーハム(すべての事に倦きて)

いつそのこと王様が疳癩を起して、お姫様を止めにして呉れた方がいゝよ。あたしは二人の仲に入つて板挟みになつてるのだからね。(掛毛氈の棹の所へかへる)もう戸口の所へお出でになられた。(コンチユバー及びファーガス登場)

コンチユバー及びファーガス

御氣嫌よう。

ラバーハム(立つて會釋する)

御氣嫌麗はしう御座ります。御安泰を祈ります。」

コンチユバー(見廻して)

ディアダアは？

ラバーハム(無關心を示して語らうとする)

スリーブ、ファドの野においでとござります。いつも駆け回り廻つて花や胡桃や木の枝をお拾ひになつていらつしやいます。思つた通りに新しい生活をなさつておられるのですから、わたくしはお心まかせにいたしておいた方が宜しいかと考へておるのでござります。(ファীগス、老婆と語る)

コンチユバー(ぶつきら棒に)

雷鳴のする晩は外に出る晩ぢやない。

ラバーハム(一層不安さうに)

お姫様はどの路にだつて馴れていらつしやいます。それに稻光りもお姫様の美しさを焦さうと、火をお下しになるやうなことは御座りますまい。

ファীগス(愉快さうに)

その通りだ。コンチユバー、まあ坐つて落つき給へ。(上衣の下から合財袋を取出す)持つて来たものを數へ分けて戸棚の中へ入れやう。

奥の部屋へ老婆と共に行く。

コンチユバー(坐つて見廻す)

わしがダイアダアに送つた敷物、掛物、銀の長柄鍋などは何處にあるのだ。

ラバーハム

敷物と掛物は戸棚の中に御座ります。コンチユバー様。サムハインの夜以來雨つどきでござりましたから、足に泥や草をつけて出入りして汚したくないと、お姫様は申しておられました。銀の長柄鍋と金の杯とは、向ふのお櫃の中に入れて錠を下しておきました。

コンチユバー

取り出して今日から使ふがいよ。

ラバーハム

かしこまりました。コンチユバー様。

コンチユバー(起ち上がつて棒に近づく)

之はあの娘のかい。

ラバーハム(その事を言ふのが嬉しくて)

左様でござります。コンチユバー様。形の思ひつきといひ、深紅色の上に紫を加へ、いつも縁と金で縁をとることゝいひ、並ぶ者がないとみな申しております。

コンチユバー(稍く不安さうに)

わしがこの前通つた時より利口になり忙しくしとるか。またエメンの生活に相應しく成長するやうに心掛けとるか。

ラバーハム(素氣なく)

そのやうなお尋ねは、陛下にもわたくしにも少しも面白くはござるませんでせう。(遠慮なく言つてしまはうと決心する) 誠を申せば、たつた才(はたち)で大王様と御結婚をなされますには、賢過ぎる程御成長なさいました。決して悪くおとり下さいますな。コンチュバー様。今夜お姫様にお會ひなされても、少しも喜ばしいことは御座りますまい。何と申しましてこの二三ヶ月以來我儘になられましたから。

コンチュバー(きびしく、然し昔より悪くはならぬのに安心して)

姫を未來の位置に相應しく仕込むのに、そんなことでは情ないではないか?

ラバーハム

わたくしはあなたに四十年お仕へいたしました。それ故今宵申し上げますが、コンチュバー様、お姫様は物事を教へて戴く鳥を持つておられますし、日中浴びに参ります淵も持つておられますから、老婆の言ふことなぞをお用ひにはなられません。若しも陛下が白い肌と赤い唇を持つたお姫様の、羊齒(した)のほりにいらつしやるお姿を御覧になられたならば、如何にあなたが貪慾とは申せ、お姫様はあなたの爲に生れたのではないといふことに、お氣づきになるでござるませう。

コンチュバー

何の爲に姫が生れたつてわしは構はぬ。彼女は屹度わしの友達になるだらう。

ディアダアの仕事箱を調ぐる。

ラバーハム(再び悲しくなつて)

あのお姫様が破滅をもたらすと云ふ言ひ傳へが、正しいのではないかと恐ろしう御座ります。何故と申しますれば、あなたのやうな身のおきまりになられたお方が、子供に對する愛や成人した女に對する愛を、お姫様のやうな少女にお向けになられるのは情ないことで御座りますもの。それから又コンチュバー様、國王がさうやつてお姫様の針を見つめたり、針の縫目を教へたりするのは情なうござるます。

コンチュバー(立ち上がつて)

お前は年寄なんだから餘り喋るなよ。(室の中を行つたり來たりする)あんな娘は豫言された禍を知つてるかい?

ラバーハム(前と前じ調子で)

わたくしが一二度お聞かせ申しました。然し生れて二月餘りの、丘を駆けてる仔羊に物を言ふも同然でござるます。…死の恐れも禍もお姫様を手馴けることは出来ません。

コンチュバー(外を見る)

あゝ、歸つて来た。お前は中へ入つて、わしがしばらくあの娘と話をする間フアーガスを引留めといてくれ。

ラバーハム(左手に行きながら)

わたくしの申しました事でお腹立ちになられましても、お姫様に對して性急なことをなされたり、お叱りなさらぬ方がよろしう御座ります。

コンチユバー(甚だぶつきらぼうに)

そんなことはする必要がないさ。わしはあの娘の輕快な所が氣に入つた。

ラバーハム(彼の話振で氣を悪くして)

お氣に召されましたと？(鼻でせゝら笑ひをして)わたくしのやうなものが誠を言ひ、賢い方がいつも嘘を言はれるのは妙なことではござりませんか。

左手の室に入る。コンチユバーは鏡の前で小時身繕ひをなし、それから稍々左手に行つて待つ。ディアダアは見すばらしいなりをして、小さな袋と一束の小枝とを腕にして登場。コンチユバーを見て一寸驚く。それから會釋をして何等の當惑もなげに爐に近よる。

コンチユバー

御氣嫌よう。ディアダア。エメン、マチャヤからお前に指環と寶石とを持つて來て上げたよ。

ディアダア

御氣嫌麗はしう御座ります。

コンチユバー

丘から何を持つて來たのだい？

ディアダア(全く落ついて)

胡桃を入れた袋と、翌日の朝の焚附にしやうと思ひまして小枝を持つて參りました。」

コンチユバー(思はず苦惱を示して)

そのやうにしてアルスターの女王に相應しい行儀をならつてゐるのかい？

ディアダア(彼の言葉を聞いて挑むやうに)

わたしは女王にはなりたくありません。

コンチユバー(殆んど嘲けるやうに)

地味な著物を著て、鷺鳥を飼つたり牝牛を小屋へ追つたりしたいんだね——谷間のそここゝにおる賤しい人々のやうに。

ディアダア(甚だしく挑む)

わたしには女王になる氣はありません。(掛毛氈の所へ行き、仕事を始める)わたしのやうな生れの

ものは、矢張似かよつた夫を迎へるのが適當でござるませう。……大鴉オカのやうな黒い髪、雪の肌、血をたらしたやうな唇を持つた男を。

コンチユバー(失敗したのに氣づく。そこで小時しほり経つて後、仕事を見ながらお世辞句調で言ふ)

お前の考へはどうだつていよ。だがどんな女王だつて、お前のやうに上手に色を使つたり、布ぬいの上に繪を縫ふ技倆を望まぬものはないだらう。(細かに見る)何の形をこしらへてゐるんだい？

デアアダ(落ついて)

三人の若者が森の中の緑の空地で、狩をしてゐる所なのでござるませう。

コンチユバー(今は殆んど嘆願するやうに)

すぐにお前は銀の鎖をつけた犬を連れて、エメンの森で狩が出来よ。わしはアルスターとブリテンとガウルから擇び抜いた白い獵犬と、灰色の馬をお前のために育てゝゐるからね。

デアアダ(前の加く自若として)

アルスターでもブリテンでもガウルでも、森の中で狩をすることに掛けては、ナイシ兄弟に勝る者はないとの噂で御座るませう。

コンチユバー(大層重々しく)

お前はお前とあれ達について豫言されたことを知りながら、ナイシ兄弟の話をしたり、繪にかたど

つたりするのは不思議ではないか？だがお前はまだ餘り物を知らない。だからわしがそれを悪くするのはわしの過失おぼろぢや。それに今日からはお前の面倒を見るのはわしの務なのぢや。わしはお前に智識がなくて困るやうなことはさせまい。

デアアダ

あなたは慥かに賢くつていらつしやいませう。

コンチユバー

わしのやうに智識の豊かなものは、智識が重荷になり恐ろしくなる程ある。それ故わしたお前のやうな若々しい、唯喜びにのみ満ちた者を選ぶのだ。……お前は年中はなやかで元氣がよいだらう？

デアアダ

それがまことかどうかは存じません。コンチユバー様。他所の土地と同じくこゝにも淋しい晝や厭しい夜がござるませう。

コンチユバー

わしが喜ばしいそして良い日を少しも持つてゐないやうに、お前も悲しい日を少しも持つてゐない。

デアアダ

どうしてあなたは此處へいらしやるのでござりますか？あなたは妻やから、良い子は王様のやうに幸福であるといふことを、お聞きになられたでござりますせう。

コンチユバー

エメンの入口で枯れ葉が風に吹かれてゐる時、年々に老ひ行く自分を眺めて、何でわしが幸福でゐられやう。だがこの頃ではわしははりえにしだが、萎み、エメンの丘の傍にあるとねり、この木に鳥が四羽止るのを見ると、ディアダアが一つ大人になり、友達となる時が一年近づいたと思ふてわしは喜ばしいのぢや。

ディアダア(殆んど獨り言のやうに)

わたしはエメンに行つてあなたの妃にはなりません。

コンチユバー(氣に留めずに)

お前はエメンで自慢が出来、幸福になれるだらう。そしてよし若者が狩が上手としても、わしのやうな者の傍にゐて、お前は始めて自分の中に限のない價值のあるのを知るだらう。わしらすべての者が入用なのは安全な立派な場所だ。だがお前はそのやうな場所を二三日の中に得るだらう。

ディアダア(仰天して)

二日のうちに！

コンチユバー

わしは部屋を用意させといた。間もなくお前はそこへ連れて行かれて、わしの后、愛蘭國中の女王となるのだ。

ディアダア(驚いて立ち上がり、頼むやうに)

わたしはこゝに留まつてゐたいのでござります。コンチユバー様。……こゝにわたしを留まらせて下さいませ。わたしはこゝの山路にも小路にも谷の人々にも、よく慣れておるのでござりますから……わたしはかういふ生活をいたしますために、生れて参つたのでござります。

コンチユバー

お前はわしと一緒にエメンにおれば、今にまして幸福で立派だ。わしはお前の友達になつて上げやう。そしてお前と豫言された禍の中に入つてやらう。

ディアダア

わたしは山の麓で我儘勝手にいたしておればそれで楽しいのでござりますから、エメンへ参つてあなたの后にはなりません。

コンチユバー

早くお前を得たいといふのがわしの望みぢや。お前が連れてこられる日や、お前がわしの大きなう

つろな部屋を歩き廻はる様をわしが眺めること等を思ひ浮べて、わしは氣疲れがしてゐるのだ。わしは慥にお前を得る。だがわしの心中には、お前を失つて矢張禍が来るのではないかといふ恐れがあるのだ。ディアダア、わしがお前に早く来て呉れといふのはそれが爲めぢや。男の言ふことには嘘がないと思つてくれ。わしはお前のことで、他のものとは比較にならぬ程心中憂慮しておるのだ。

ディアダア

わたしには行くことは出来ません。

コンチユバー(勝ち誇つた調子をとリ)

わしの喜びはお前を得ることぢや。わしは長い間アルスターの玉座でお前を待つてゐたのだ。この地に留つていつ迄も小供でゐるよりは、エマーやミーバのやうに成長して、わしの友達になりたくはないか？

ディアダア

あなたはわたしを御存知ないのでございます。あなたはわたしをお手に入れなされても、何の楽しみもござりません。コンチユバー様……わたしは速かに過ぎ行く日を永いこと見守つておりました。わたしは永いこと氣儘に暮して参りました。それ故そのやうにいつもわたくしは生きたいのでございます。

コンチユバー(そつけなく)

フアーガスにわしと一緒に行くやうに行つて呉れ。今夜はお前がスリーブ、フアドにゐる最後の夜だ。

ディアダア(今は嘆願するやうに)

今少しお暇を下さいませ。コンチユバー様。禍が豫言されておりますのに、このやうに速かに連れ去られますのは、情ないことでは御座るませんか？ 一年のお暇を下さいませ。コンチユバー様。わたしのお頼みいたしますのは永いことでは御座るません。

コンチユバー

お前がこゝで寂しくはにかみ屋に成長する間、四十年と二週間わしはエメンでお前の聲を待つてゐたのだが、それは長い年月だつた。わしは老人ぢや。だが非常に戀に陥つてゐる。然しディアダア、わしはアルスターの王ぢや。(立ち上がる)わしはフアーガスを呼ばう。そして夜明けにはエメンで仕度を整へやう。

左手の扉の方に行く。

ディアダア(縋りつき)

どうか呼ばないで下さいませ。コンチユバー様。……一年の間わたくしを自由な身でおかれますや

うお約束下さいませ。……お願いいたしますのはたゞの一年で御座ります。

コンチユバー

次の年も又一年を頼むだらう。それでは際限がないのだ。(呼ぶ)ファーガス！ ファーガス！(デアアダアに)若い女はいつも愚圖々々してゐる。戀人の方で言葉をかけねばならぬのだ。(呼ぶ)ファーガス！

デアアダアはファーガスがラバーハムと老婆を伴つて出て來つたので、彼から飛び退く。

コンチユバー(ファーガスに)

暴風が来るやうだ。わし等は夜のまだ更けぬうちに歸つた方がいゝ。

ファーガス(愉快さうに)

御機嫌よう。デアアダア。(コンチユバーに)最早夜も更けてゐる。それに雨で水が出てゐる中を、飛石や險しい小路を滑つて行くのは、王のすることではない。(助けて上衣を著せる)

コンチユバー(決心のついたことを喜んで、ラバーハムに)

もう數日間今迄通にしようとつてくれ。さうしたらお前もデアアダアと一緒にエメンに呼んでやらう。

ラバーハム(従順に)

仰せのことは承知いたしました。

コンチユバー

御機嫌よう。

ファーガスと共に退場。老婆屏を鎖す。

ラバーハム(顔を蔽ふてゐるデアアダアを眺めながら)

あなたは御結婚をなされるとわたくしが申したではござりませんか。あなたは御自分より賢い人達の言葉を耳に入れないで、結婚をお早めになりました。

デアアダア(興奮して)

わたしがしたのではありません。お前はわたしをこゝから連れ出しておくれ。ラバーハム。そして安全に山の中へかくまつておくれな。

ラバーハム

半日のうちにあの方は、わたくし達の跡を探し當てるでござりませう。さうしたならばあなたはお心ならずもあの方のお后になられ、わたしもわたしの可愛いあなたも、永久にみじめなものになるでござりませう。

デアアダア(目前の現實におのゝいて)

コンチユバーに逆ふものはないの？

ラバーハム

コンノートのメイバが、あの方のやうな方ばかりでござります。」

ディアダア

フアーガスは逆はない？

ラバーハム

疝癢をお起しになられれば逆ふでござるませう。

ディアダア(急に興奮し低い聲で)

ナイシ様やその兄弟たちは？

ラバーハム(堪へ難いやうに)

ナイシ様やその御兄弟たちのことを申すのはおよし遊ばせ。……つまりは誰もコンチユバー様に逆ふことは出来ないでござります。ですからそのやうなお話をいたしますのは、馬鹿々々しいことではござるませんか。誰でもコンチユバー様に逆つたものは憂目に逢ひ短命に終るのでござります。

ラバーハム脇を向く。ディアダア興奮し固くなつて立ち上がり、窓の所へ行つて外を見る。
ディアダア

飛石は水に浸つてゐる？ ラバーハム。今夜は山は暴風^{おん}てゐるかしら？

ラバーハム(物珍しさうにディアダアを見て)

飛石はたしかに水に浸つております。ほんとに今夜は何年ぶりの嫌な晩でござるませう。

ディアダア(櫃と引き開け、著物と掛毛氈を引き出す)

この敷物や掛布を、歩きよいやうに窓の傍や卓子の所にお敷き。そして銀の長柄鍋や金のコップや酒の樽を二本お出し。

ラバーハム

何うなさいましたので御座ります？

ディアダア(衣服を掻き集めて)

早くお並べ。ラバーハム。今夜はぐずぐずしてゐる必要はないよ。早くお並べ。わたしはお部屋に入つて、エメンから送られた美しい著物と寶石をつけませう。

ラバーハム

暗くておまけに大雨で濡れておりますのに、こんな時刻に衣服をお著け遊ばすんですつて？ あなたはお頭^{つじり}が變におなりになりましたね！

ディアダア(衣服を掻き集めながら絶叫する)

わたしはダンディルガンのエマーが、コンノートの家にゐるメイバのやうに衣服^{おん}をつけませう。

若しもコンチユバーがわたしを后にするのなら、わたしは支配者である後の権利で、勝手に海の端まで出かけてもいゝのです。……わたしが立つて今夜見廻すことの出来る處へ、敷物や掛布をお並べ。コンノートの牝鹿の皮や西部の山羊の皮をお並べ。わたしは子供や玩具にはなりません。わたしは一番美しい著物をつけませう。クーチユレンが馬に鞭をつけるやうに、或はコナル、サーニイチが楯を腕にもつやうに、エメンに連れて行かれるのは嫌ですからね。今日からわたしは愛蘭の人々をひーすを吹く風のやうに變らせませう。

ディアダア部屋に入る。ラバーハムと老婆は互に顔を見合はせる。それから老婆立つて戸の隙間からデアアダアを覗き見し、注意深く閉ぢる。

老婆(驚いて囁く)

まどつていられましたほろをお棄てになり、裸體でいらつしやります。輝かしい髪を束ねておいでよす。お狂ひになられたのでござるませうか。ラバーハム、それともメイーバのやうな女王になられても差支へないのでござるませうか？

ラバーハム(掛布をかけながら、非常に心配さうに)

大層お心が亂れておられる御様子です。それでなければわたしの心がいたく亂れておるのでせう。けれど勝手にお振舞ひなされて、世の中をお騒がせになられても差支へはござるますまい。

老婆(彼の女を助けながら)

お姫様が來られぬうちにさあ早く。……今夜まであれ程静かであつたお姫様の前で、わたし達が駆け廻るのを誰が考へ得たでせう。王様はお姫様にお勝たれになつたのでせうか。ラバーハム。若しわたしがコンチユバー様であつたならば、わたしはお姫様のやうな方とは結婚いたしません。

ラバーハム

それを窓の近くにおかけ。それは屹度お姫様を喜ばせるに相違ない。つまりお姫様のやうな方がいとも人の頭に立つのでせう。

老婆(窓の所で)

空には眞黒な雲の山が現はれ、地には數十年來の大雨が降つております。神様、コンチユバー様をお助け下さいませ。今夜コンチユバー様はお部屋に歸つて、大元氣で二三日中にお姫様を抱けることをお考へになつておられます。しかしあのお方はお氣の毒な身の上になられませう。

ラバーハム

この話を終りまでお聞きにならぬうちに、コンチユバー様は大層お悩みになり、お嘆きになるでござるませう。

右手の戸に強いノックが聞える。

ラバーハム(はつとして)

誰だらう。

ナイシ(外で)

ナイシとナイシの兄弟です。

ラバーハム

わたし達は孤獨な女たちです。まつくらな夜に何の御用がおりますか？

ナイシ

わたし達は森で若い乙女に會ひました。そしてその乙女の申すには、若し川が小路まで溢れそして山の麓から洪水が押寄せて來たら、此處で凌いでもよいと仰言つたのです。

老婆恐怖の余り兩手をつかみ合せろ。

ラバーハム(非常に驚いて)

お入りになつてはいけません。……どなたも此處へはお通しいたすことが出来ません。それに若い乙女などはこゝにはおりませぬ。

ナイシ

中へ入れて暴風を凌がせて下さい。雲が晴れれば出て参りますから、中に入れて凌がせて下さい。

ラバーハム

前へおまはりになると小屋がござりますから、そこでお凌ぎなさいませ。お入りになつてはいけません。

ナイシ(どんどど叩く)

お開けなさらぬと戸を壊しますぞ。

扉がゆすれる。

老婆(おどくした小聲で)

あの方々をお通しなさいませ。そしてディアダア様をば今夜は室からお出さなさいませ。

エンリとアーダン(外で)

開けろ！ 開けろ！

ラバーハム(老婆に)

入つてディアダアをお守り。

老婆

わたくしにはお守りが出来ません。わたくしにはお止めすることが出来ません。わたくしが戸を開けますから、あなたがお守り下さいませ。

ラバーハム

わたしは此處にゐてあの方々を追ひやらねばなりません。(假面で顔を蔽ふ)入つてお姫様をお守りなさい。

老婆

神様、わたし達をお守り下さい。(奥の部屋にかけ入る)

豊

開けろ!

ラバーハム(戸を開けながら)

ではお入り下さいませ。ですけど、お入りになられますと御不幸にお會ひになりますよ。

ナイシ、エンリ、アーダン、内に入る。そして驚いて四方を見廻す。

ナイシ

これは物持ちの家だ。賤しい人の住居ぢやない。

ラバーハム(顔を半ば覆ふて坐る)

賤しい人の住居ではありませんね。早くお出でなされたが宜しうござるませう。

ナイシ(上衣から雨水をふるひ落しながら、嬉々として)

夜の暗がりには王侯の安樂を得る幸福を、何時の日に吾々は得たことがあつたらう! 森で狩をしてゐられるアルスターの長者か誰が来られるに違ひない。飲んでも構ひませんか?(罎をとり上げる)健康を祝さう。だがこの酒はどなたのです?

ラバーハム

その方をお知りになる必要はありません。

ナイシ

ではあなたの健康と長壽を祝さう。

三人に酒をつぐ。飲む。

ラバーハム(大層意地悪く)

許しのないのに招待された人のお入りになり、要もないのに御質問なされるなど、あなた方は大きなほつちやんですこと。……あなた方が静かな場所をしつらへて、おとなしい女王とお遊びなされやうとする時、若い男が覗き込んだり、話を持ち込んだりしましたならば、あなた方はその男をどうお考になられますか?わたしが乙女であつた頃には、あなた方三人のやうに若くて馬鹿の骨頂であつた時代にも、アルスターの人々は行儀がよかつたものでござるます。ナイシは酒呑みで泥棒だ、エンリは見知らぬ人の罎のコルクを抜いたと、タラの語り草になるでござるませう。

ナイシ(彼女の傍に腰を下ろし、全く愉快さうに)

あなた位のお年になれば、コンチュバーのやうな王様も腕環に唾を吐き、女王方が昇る月に舌を出す夜のあることを御存知でせう。今宵我々はそんな気分なのです。それから我々が望むのは酒ばかりではありません。こゝで凌いでもよいと仰言つた、若い乙女は何處におられるのですか？

ラーバーム

お會ひたいとお尋ねになられるのでござりますか？……わたしたちは身分の高いものでござります。ですからわたしはあなたが上衣に下けておいでになる金の釦金をわたくしに下さらないやうに、あなた方に若い乙女の跡を追はせませぬ。

ナイシ(彼女に金の釦金を與へる)

どこにゐるのですか？

ラーバーム(彼の腕に自分の手をのせながらそつと囁く)

丘の所までお戻りになつて、三つある中の二番目の小山の所をお曲りなさい。小路が岩の上に通つてゐるのが見えます。それから又家々に犬の吠えるのが聞えます。それをたよりにお出でになると、これの木の下に小屋が御座ります。そこに軽やかな乙女がおりますが、多分それがお話の方でござります。

ナイシ(嬉々として)

ではその方とあなたの健康を祝さう！

アーダン

あなたがあの方位若かつた時代の爲に！

エンリ(喫驚して小聲で言ふ)

ナイシ！

ナイシ見上げる。エンリ彼をさしまねく。近よる。エンリ手にした金の杯の上のある何物かを指さす。

ナイシ(驚いて眺めながら)

これは王のだ。……縁に王の印がある。コンチュバーがこゝにお泊りに來るのですか？

ラーバーム(この上なく當惑し飛び上がる)

誰がそれをコンチュバー様のだと申しましたのです。覗き廻つたり乙女の後を追つて人に迷惑をかけるなど(大層傲慢に語る)あなた方は何といふ若い愚か者でござりませう。どうしてあなた方はエメンからこゝへ迷ひ込んだのです？(非常に烈しく)あなた方は若者は馬鹿の骨頂を盡しても、咎められぬとお考へになるのでせう。

ナイシ(大層眞面目に)

小降りになつたらうか？

アーダン

雲が切れてゐます。……谿の間にオリオンが見えます。

ナイシ(尙愉快氣に)

戸を開けてくれ。我々は^{せむりこ}の木と岩の間にある小屋へ行かう。貫木をあけて引けばいい。

ナイシ(時やさしく呼ぶ) デイアダア王女の如く非常に美しく装ふて左手より入り来る。暫時立つてゐる。それから扉が開かれた

ナイシ！ お行きでない。ナイシ。わたしは悲嘆に暮れてゐるデイアダアです。

ナイシ(喫驚して)

そして森を歩いて歌ふあなたの聲の美しさに、鵲に天に向つて不平を言はせたのはあなたです。

デイアダア

あなたがお話しになられたのはこのわたしです。(ラバーハムと老婆に)二人の王子エンリとアーダンを、わたし達が食事をする小屋にお連れして、一番上等な旨しいものを上げておくれ。わたしはナイシにだけ用事が澤山あるのです。

ラバーハム(彼女の調子に畏れて)

かしこまりました。わたくしはあの方々のお許を願ひませう。わたしは皆様を馬鹿に致しました。

デイアダア(エンリとアーダンに)

少時小屋にお通しいたしますのを悪くおとり下さいますな。コンチュバーの料理人の作った夕餐を差しあげませう。それからラバーハムはあなた方にメイーバ、ネツサ、ロフ等のお話をいたすでせう。

エンリ

わたし達はラバーハムからあなたのお話を伺ひませう。それで喜んでお望み通りに致します。

デイアダアとナイシの外一同退場する。

デイアダア(中央の高い椅子に腰を下ろして)

この腰掛にお出でなさいませ。ナイシ様。(腰掛を指さしながら)低いけれど王もエメン、マチヤの王座より、喜んで今宵それに腰を下ろすでせう。

ナイシ(腰をかける)

あなたはコンチュバーがアルスターのすべての男から秘してゐた、フェドリミツドの姫ですね。

デイアダア

デイアダアがアスナの息子の破滅であるとか、デイアダアがさゝやかなる墓を傍に持つてゐるとか、

傳説が長く語り傳へられるとかいふ豫言を、多くの人々は知っております。

ナイシ

長い間男はデアダアのことを語つておりました。すべての天賦てんぷを具へ、併ぶ者のない美を持つた乙女のことを。多くの人々はそのことを知っております。あなたは女王におなりになるのに相應あははしく御成長なされましたから、今夜私の位置におるためなら、莫大なるお金を喜んでお出しになる王様もござるませう。

デアダア

多くはいりません。ナイシ様。……わたしは満月の時に森におりました。そして歌の聲をききました。そこでわたしは裾を掻きあつめ、小路を岩の端まで駈けつゞけました。そしてわたしは下に紅い上衣を着て、歌を唄ひながら行くあなたをお見かけいたしました。あなたは愛蘭の花とうたはれる弟達の先頭に立つていらつしやいました。

ナイシ

それであなたはくらがりで私達をお呼びになられたのですね。

デアダア(低い聲で)

それ以來わたしは或時は持ち去られた仔羊を求める牝羊のやうでした。また或時は星の中に新しい

黄金こがねを見、月の面に新しい顔を見ました。そしていつもエメンを恐れておりました。

ナイシ(氣を落ちつけて少し後退りを始める)

立派な方のためにお生れになつたあなたが、こんな場所にいられるのは淋しいことです。

デアダア(やさしく)

今夜はわたしは世界に又とないよいお友達を持っております。

ナイシ(尙少し形式張つて)

わたしこそ一番よいお友達を持つてゐるのです。あなたはエメンで女王におなりになれば、お友達やお仲間も一人もござるますまい。

デアダア

わたしはエメンで女王にはなりません。

ナイシ

コンチユバーはあなたを女王になさる誓ひをお立てになりました。

デアダア

それ故わたしは澤山の悲みを持つた乙女、嘆のデアダアと呼ばれるのでせう。……なぜなればあなたとわたしとは面白く暮して行けるのですもの……一番よいものと一番高價なものを持つのは、

たとへ少時しばらくの間であつても面白いに違ひありません。

ナイシ(甚だ困惑して)

だが勝ち誇るのも勇むのも束の間に過ぎぬでせう。

デアアダア

あなたは行つてはなりません。ナイシ様。群人ひとびとや金銀でとりまかれた部屋の中で老ひ朽ちて行く王に、わたしを残して行つてはなりません。(前よりも早く)わたしはエメンで閉ぢ込められてはおりません。また沈黙や間近い死のみではつまりません。(立つて彼の傍を去る)わたしは永い間獨りで森の中におりました。そしてわたしは昇る太陽を嫉妬で赤くするやうな富で購はれるのですから、死をも恐れませんでした。月が衰へたとき蒼ざめ、淋しくなるやうな富ですもの。(彼に近寄り、男の肩に手をのせる)わたし達の破滅について豫言されてゐることも、些細なことではござりませんか。ナイシ様。すべての人々は老ひ朽ちて行き、最後には大きな破滅に陥入るのですもの。

ナイシ

然しわたしがあなたに、血や壊れた身體や墓の汚物の話をおさせ申すのは辛いことです。……デアアダア。わたしたちは待つて、たそがれに丘のどちら側かで會ふことにしたらよいでせう？

デアアダア(落膽して)

あの方の使が参るのです。

ナイシ

使が来るんですつて？

デアアダア

屹度翌日の朝か、その次の日に。

ナイシ

では行きませう。わたしはあなたのやうな方をコンチュバーの手に渡しはいたしません。たとへ一週間の後にわたしの墓が掘られても。(外を見る)星が出てゐます。デアアダア、さあ早く一緒にいらつしやい。アルバンに住む時に、海の中の小さな島の間を旅する時に、毎夜星が我々のために燈火となるでせうから。わたし達の抱いてゐるやうな喜びを持つたものは、他に決してありません。デアアダア、あなたとわたしのやうに、夜も朝も太陽の高い時も戀の極みを盡してゐるものはありません。

デアアダア

然しわたしは住み馴れたこの場所を去るのが恐ろしくござります。春になつて林檎の木が扉の柱の傍で芽生える頃、向ふの小山で物思ひをする時、わたしは寂しくはないでせうか？(過ぎ去つたあ

る物にやゝ動じる)そのやうに幸福であり若々しいあなたを、破滅に導くのは恐ろしくはないですか。ナイシ様。

ナイシ

あなたがコンチユバーと一緒にエメンにおられるのに、この先わたしが生き長らへておられるとあなたはお思ひになるのですか。ディアダア。あなたの唇を見たわたしが、野兎を追ふてゐられるとあなたはお考へになるのですか。

二人が互にしつかと抱き合つてゐるところへラバーハムが入り来る。

ラバーハム

ディアダア様、あなたはお氣が違はれたのでござるますか。世を滅ぼさうと今夜をお擇びなされたのですか。

ディアダア(大層落ついて)

わたしをエメンへ呼びよせるのに、コンチユバーは今夜を擇んだのです。(ナイシに)エンリとアーダンを呼び入れて下さい。そして今日からは兎の足音も恐ろしいこの場所から、わたしを連れ出して下さいませ。(ナイシ行く)

ディアダア(ラバーハムに縋りつき)

わたしが行くのを悪くお思ひでないよ。ラバーハム。お前はわたしのよいお友達でした。そしてスリープ、フアドに住んでゐる間、お前はわたしに自由と喜びとを與へてくれました。お前、いつかディアダアのお守りをしたことがあるといつて喜ぶでせう。

ラバーハム(感動して)

あなたのお傍をお離れたしましてはわたしには喜ばしいことは御座るません。あなたのおなされますことは餘りひどうはござるませぬか。然しそれも仕方がござるません。春になれば鳥は連を求め、葉の落ちる頃になれば牝羊が連れを求めます。然し乙女は夜も日も戀人を持たねばなりません。

ディアダア

お前は夜が明けたらエメンへ行かれるかい？

ラバーハム

わたくしは参りませぬ。わたくしは南のブランドンへ参ります。そしてあなたのお顔や、並ぶ者のないあなたの一寸した御様子を見るため、わたくしは海の上を彼方此方に舟を走らせませぬ。

ナイシ、エンリ、アーダン、老婆を伴つて戻つて来る。

ディアダア(ナイシの手をとつて)

二人の弟方、わたしは豫言された禍を受けに、ナイシとアルバンに北へ参ります。あなた方はエメ

ンのコンチユバーにお言傳て下さいますか？

エンリ

我々もあなたと一緒に参りませう。

アーダン

我々はあなたの下僕とも獵僕ともなりませう。ディアダア。

ディアダア

あなた方三人の兄弟の中一人だけが勇ましく、そして禮儀正しいのではないでせうか？ ラバーハム、二人を結婚させて下さいませんか？ お前はお祈りや習慣を知つておいでませう。

ラバーハム

御免遊ばしませ。わたくしはあなたが陥入らうとしていらつしやる破滅に、どうして手を出したがりませう。

ナイシ

エンリに結婚させて貰はう。……あれなら賢者と一緒におつたから、そのやり方を知つてゐる。

エンリ(二人を握手させる)

天地にかけてわたしはディアダアをナイシと結婚いたさせます。(後へ退り、両手をあける)
空氣も水も風も海も晝も夜も二人に祝福を與へますやうに。

(幕)

第二幕

アルメン。初冬の早朝。ディアダアとナイシの天幕の外に森がある。ラバーハム外套に包まつて登場。

ラバーハム(呼ぶ)

ディアダア様。……ディアダア様……

ディアダア(天幕から出て来る)

よういらつしやいました。ラバーハム……どなたの舟がアルスターから來たの？ 林の向ふに舟を漕いでるのが見えたから、お前が來るのだと思つてよ。

ラバーハム

夜明け前の急雨の中をやつて参りました。

ディアダア

それでどなたがお出でになるの？

ラバーハム(悲しさに)

驚いてはいけません。又悪くおとりになつてもいけません。ディアダア様、ファーガス様かコンチ

ユバー様から、ナイシ様とその御兄弟達をエメンに連れ歸るやうにといふ、和睦の使を持つて参つたのでござります。(坐る)

ディアダア(氣輕に)

ナイシ様やその御兄弟はこゝで満足してゐます。ですから、どうしてアルスターのコンチュバー様の所へ歸りませう。

ラバーハム

あの方々は死に面しますやうな場所にも参るでござりませう。(益々興奮して)わたくしはコンチュバー様があなたを得やうとなされて、ナイシ様をお殺しになるのではないかと氣遣ひます。そしてそれはアスナの息子等の破滅でござりませう。そんなことを心配いたす私は大馬鹿者かも知れませんが。然しあなた様を深くお愛しいたします者は、絶えずお氣遣ひいたしましたも宜しいのでござります。

ディアダア(益々心配氣に)

エメンはわたしにもナイシ様にも安全な場所ではありません。ラバーハム、森の中でわたし達がこんな静かに暮しておるのに、平和でゐられぬのは辛いことではないかい？

ラバーハム(印象を與へるやうに)

辛いこととござります。然しわたくしの言葉をお汲になられ、地におかけになり、太陽におかけになり、月の四時におかけになられて、ナイシ様をエメンにお歸しせぬとお誓ひなさいませ——善意でも悪意でも——コンチュバー様が愛蘭の玉座におられます間は……お誓ひなさればあなたは救はれるのでござります。

ディアダア(望みもなく)

誓ひには起らうとする出来事を止める力はありません。わたしはコンチュバー様とナイシ様のお話や、老人が言つた豫言を變へる力を持つておりません。

ラバーハム(攻撃するやうに)

あなたの幸運の暗くなるのをコンチュバー様や貴族方が恐れてゐたにも拘はらず、立派に著飾つてナイシ様と去られたあの夜、あなたをなされましたことには力が御座りませんでしたでせうか。あの夜あなたは苦みと悶えとを持ち來らすに充分なお力を持つていらつしやいました。今わたくしがナイシ様をお救ひいたしまする道をお示いたしますから、わたくしをお助けする積りで、小枝も薬もお動かさなさいませ。

ディアダア(稍々傲然と)

わたしに對して高い聲をお出しでない。ラバーハム、たとへお前がナイシ様をお護りする考をお持

ちでも。

ラバーハム(怒つて叫ぶ)

ナイシ様ですつて？ 烏が明方にあの方の腿の骨を剥いておりましてもわたくしは構ひませぬ。あなたが冷い寢床でお眼を覺された時、あなたがお心を捧けてお出でになる男がおりませぬその時のあなたの絶望と慟哭とを拂ひ除くために、わたくしは騒いておるのでござります。(俄かに腹を立て、立ち上がり)しかしそれはナイシ様お一人ではござりませぬ。今日、あなた様を恐れで満しませぬやうなあの方の危険を考へますわたくしは、大馬鹿者かも知れませぬ。

デアアダア(鋭く)

お止め、そのやうなことは愚者のいふことです。若しもナイシ様に萬一のことがありましたら、わたしも生きてはおられぬといふことをお前もよく知つておいでよせう。(悲嘆にくれつゝ)牛が長い影を草の上に落しながら鷹の所へ歩いて行くのを毎夜眺めたり、或は又(感情的に)あたしが日向で横になつて居る時、エンリとアーダンが愉快さうに歩いて来て、女王様として幸福な平和な點ではデアアダア様に勝るものはないといふのを聞きながら、七年の間わたしが恐れておつたのはこの日だといふことを、お前はよく知つておいでよせう。

ラバーハム(全く和げられ切れずに)

若しもナイシ様がお出なされると申されば、あなたも喜んでお出でになられますか？

デアアダア

行くのも止まるのもわたしには恐ろしい。ラバーハム、わたし達のやうに幸福であつてもこゝは寂しいねえ。それ故毎日々々、今日は昨日のやうかしら、明日は過去の同じ日と匹敵するだらうかと我が心に問ひ、又瘦せ衰へて永久に喜びが去る迄生きておるのは甲斐あることだらうかなど、いつも氣遣つておるのです。

ラバーハム

そのやうなことがお氣懸りなら、若い乙女や詩人は年のことをとやかく騒ぎますけど、老ゆるのは苦ではないといふことを申し上げませう。(熱情的に)わたくしが今日見ましたやうに、あなたが昔を顧みられ、戀を抱ける若者の愚さで心をお傷めにならなければ、老ゆることも苦ではありませぬ。(デアアダアに近寄り)わたくしの言葉をお受けになつて、ナイシ様をお止め遊ばしませ。さうなさればあなたが老婆の智慧をお持ちになり、小さな孫が叫び廻る頃には、あなたは今宵赤い唇と白い腕とをもたれ、寂しい道を屈せぬ王とお歩きになられる以上の喜びを、お持ちになるでござりませう。

デアアダア

今日より後は乙女の喜びも、老婆の喜びもわたしにはありません。ナイシ様が岸邊におられ、その傍にファーガス様がおられるのですもの、わたし達はおしやべりをして何になりませう。

ラバーハム(絶望的に)

ファーガス様は空の月に新しい路を歩かせますやうな話上手でござりますから、わたくしの注意はもう遅うござりました。(非難の聲で)あなたは今日ナイシ様をお止めなさらぬでござりませう。そしてさうゆうお高い所にいらつしやるのでござりますから、生涯あなたのお聲に縋ります者にとりましては、あなた様が禍であり、苦痛であるのも妙な話では御座るませんか。(氣をくさらせて)わたくしの泣き聲を悪くおとり下さいますな。多くのものと違ひ、澤山の裸の死體を見ましてもわたくしは平氣でござります。然し終りの近づいてくるのに喜んでおられまするあなたを見ますと、わたくしはたまらなくなります。

どちらかと云へば見すばらしい^{みなり}服裝で、オーウエン大急ぎで入り来る。そしてデアアダアに挨拶をする。

オーウエン(ラバーハムに)

ファーガスの部下があなたを呼んでおります。通りがよりのあなたをお見かけしたので、ファーガス様とナイシ様が下でお話ししたいとのことです。

ラバーハム(嫌疑の情を以て彼を見ながら)

このやうな朝に出會ふなんて、なんてわたしは不幸ものだらう。たとへお前が間諜であつても、わたしは言ふだけのことを言つて来やう。(退場する)

オーウエン(デアアダアに)

さあ、あなた獨り切りです。沼の冷たさで^{おこり}瘧と喘息を病ひながら、三週間も待ちに待つて、ナイシがファーガスに捕へられたのをわたしは見ました。

デアアダア

わたしはファーガスの報知^{しらせ}を聞きました。なんでお前はアルスターから来たのですか?

オーウエン(一塊りのパンを見つけ、坐つて貧り喰ふ。大きなナイフで切る)

私の頭骸骨のひびをしめつけるやうな満月だ。頭の狂つてゐない時に愚か者の女房を追ふて、九つの海を越えたものがまああらうか。

デアアダア(氣抜きの體で)

お前はエメンを離れて大部経つだらう。あすこには女王と語る時には禮儀があつた筈です。

オーウエン

永いことです。沼の上におるサクソンの奴等の傍にゐて、行儀を忘れることがもう三週間にもなる。三週間は長い時です。然しあなたは七年間ナイシ及びその弟達と一緒におりました。

ディアダア(絹衣や寶玉を包み始む)

お前には三週間は長いかも知れませんが。然し七年もナイシ様やわたしにとつては短いものです。

オーウエン(嘲弄するやうに)

たとへ短い間であつたにせよ、あなたのやうな方はたんとはありません。タラの女王は旅人に會つて、旅人の眼のうちを諷ひの焔の躍るのを見るまでには、毎日歩かねばなりません。お話し下さい。(彼女の方に身を傾ける)あなたは夜明に側で躰をかく、同じ男でいつも満足していらつしやるのですか。

ディアダア(非常に靜かに)

夜明けに枝に光を投げ與へる、あの同じ太陽を七年間見て満足しております。ほんの僅かな間でも、私達が同じ物を持つのを賢い人は悲しがつてゐます。(嘲けつて)ある男が馬鹿でおしやべりなら、この世は馬鹿なところですよ。

オーウエン(鋭く)

ふん、御勝手になさい。こゝに留つてナイシと共に朽ち果てるか、エメンのコンチユバーの所へお出でになるかです。コーチユバーは大きな腹をし、きらりと光る冠の下から眼が落ちかゝつてゐる皺だらけな馬鹿者です。ナイシは氣が抜けて疲れるにきまつてゐます。然しディアダア、道は澤

山にあります。わたしはあなたのお眼にとまり、親切な言葉をかけて戴けないのなら、生きておるより泥穴で晒された方がいゝのです。詰らない口汚ない野郎に接吻なされる程、あなたがお淋しいのは情けないことです。

ディアダア

エメンでお前のお友達になれるやうな似よりの女はゐないの？

オーウエン(烈しく)

あなたのやうな方はおりません。ディアダア、それですから、わたしは今宵あなたがファアガスとお歸りになるかどうかと、お尋ねいたしておるのです。

ディアダア

わたしはナイシの好きな所に行きます。

オーウエン(怒りの叫びをあげて)

ナイシ、ナイシですつて？ よござんすか。あなたはあなたを見るあれの羊みたいなの二つの眼の中に、次第によそ／＼しさが現はれてくるのに、間もなくお氣づきになるでせう。お信じにゐるかどうか、わたしの父はよくはりえにしだやびーすの中で、頭の上を小鳥が囀つてゐる時にラバーハムに接吻しました。然しラバーハムは今では屍かたなにたかつてゐる大鴉をも驚かす程です。(悲しい叫

びを上げる。そのため聲に威厳がでくくる。女王も年をとります。デアアダア、白い長い腕はなくなり、背も屈みます。女王の鼻が顎を掻くやうになる程伸びるのは見ても情ないものです。

デアアダア（外を見る。稍不安げに）

ナイシとフアーガスが路を辿つて來ます。

オーウエン

ではわたしは行きませう。たとへ七年の間あなたのお傍におつても、私は蚊や塵を嫉ましく思ひます。（外套をまとふ。警告するやうな口調で）デアアダア、あなたに謎をかけて上げませう。何故わたしの父はコンチュバーのやうに老人で醜くはないのでせう？ お答へがありませんね？……ナイシが殺したからです。妙な表情で）夜眼を覺した時、ナイシの躰を聞きながらか、或はアルバンがアルスターでわたしが爲てるる妙な話をお聞きになつた夜、そのことを考へて御覽なさい。

オーウエン退場、直ちにナイシとフアーガスが他の側より登場す。

ナイシ（面白さうに）

フアーガスがコンチュバーの所から和睦の使をもつて來た。

デアアダア（フアーガスに挨拶をする）

よういらつしやいました。さあ、御休息なさいませ。フアーガス様、岩を登つていらつしやるまし

てはさぞお暑く、喉が乾いたでござるませう。

フアーガス

日當りのいゝ所をアルバンでお探しになりましたね。だがあなたとナイシをエメンに連れかへるためなら、誰だつて喜んでこれより高い岩を登るでせう。

デアアダア（屹つとなつて）

皆が御返事をいたしましたのですか。皆が行きたいと申しましたのですか。

フアーガス（溫和に）

いや、まだです。然しわたし達の若い頃には、愛蘭に廿週間もおられれば、一生を捧けてもいゝと人々は思つておりました。そして愛蘭の高い空と、沼の上に鳥の囀る寂しい日とに間もなく別れを告げねばならぬこと程、老人の胸を傷めるものは今日まで外にありませんでした。今日からお出でなさい。愛蘭を除いては、ゲールの民が平和を得る場所は他にありません。

ナイシ（荒々しく）

それは眞實です。然しコンチュバーがエメンにおられる間は、わたし達にはこゝの方がいゝのです。

フアーガス（羊皮紙を彼に渡しながら）

さああなたの擔保とコンチュバーの印だ。（デアアダアに）わたしはコンチュバーと共にあなたの保

證人にならう。あなたはいつまでも若くはない。だから愛蘭の海邊に氣持のいい家を建て、あなたの子供を王子として面倒を見させる仕度をする時が来たのです。年をとり若さが失せるまでさまよふても面白いことはない。だから今宵出かけたがい。足を下ろして「さあ愛蘭だ」と言ふ時の喜びは大したものだよ。

ディアダア

コンチユバー様がエメンの王である限りは、面白いことは御座るません。

フアーガス(殆んど頬はしげに)

あなたはコウナル、スウナツチの印と、ミス王を疑ふのですか。(外套から羊皮紙を出してナイシに與へる。尙やさしく) 森の中に獨りでおれば氣が弱くなる。だがもし臆病な女が(稍々ディアダアを嘲弄して) アスナの息子の王になるのを妨げ得たら情ないことだ。取る年を考へるがい。ディアダア、エメンのどの王かの傍に、顯官の白髮判事としてナイシがおるのを、あなたは見るこゝとが出来るではありませんか。あなたのやうな女王が、王子と白光を浴びてふざけながら時を消す外に何の考へもないのは、哀れなことではありませんか。

ディアダア(稍傲然として傍を向く)

どうともナイシ様に任せませう。(又フアーガスの方を向く) けれどフアーガス様、あなたはお考へ

通りなされたがよいでせう。さうすれば死ぬまでナイシ様やその兄弟方を、叛逆者の掘つた墓へ連れて行つたのは自分ではないと誓へませう。(テントの中に入る)

フアーガス

女王がかくも寂しくおぢ恐れておるのを見るのは情ないことだ。(ディアダアに聞えなくなるまで用心する) さあ、わしの言葉を聞いてくれ。お前は友達である男や女の所へ歸るがい。疲れるまでうろくして、荒々しい眼付きでディアダアを苦めないでな。お前は永いことこゝにゐた。だからわしの言葉の正しいのがお前には分るだらう。

ディアダア酒を濺げた角の盃をもつてテントから出て来る。ナイシの話の初の方を聞いて驚きの余り石の如く立ち止まる。

ナイシ(非常に考へ深く)

わたしはあなたに偽りは申しません。少し前鮭を釣る糸を投げながら、又は野兎の走り廻るのを見ながら、わたしはあれの聲の耳につく日の來るのを恐れた日もありました。(非常にゆつくり) そしてディアダアもわたしの倦きたのを見てとりました。

フアーガス(同情するやうに、然し勝ち誇つて)

わしもそれを知つてゐる。ナイシ……よいかね、ディアダアはお前の恐怖を知つてゐる。それ故こ

れからはこの森では平和は得られぬ。

ナイシ(確信をもって)

あれは未だ知りません……デアダアには年をとるといふ考も、疲れるといふ考もないのです。それ故不思議な行動がとれるのです。彼女は疫病の起つてゐる町におつても勇ましく、そして笑を堪へておるだけの元氣があるのです。

デアダア酒の入つた角の盃を取り落して、その場にうづくまる。

フアーガス

その氣概も今にデアダアからなくなるだらう。然しそれからそれへと喋りつゞけてゐる要はない。お前は今夜エメン、マチャへ行くかね。

ナイシ

行きません。フアーガス。わたしは年をとり疲れ、デアダアが嬉しくなくなる夢を見ました。然し夢は夢に過ぎません。マセンの谿の一夜にくらべれば、コンチュバーの印も、あなたのエメンのお話も、ミースの愚者おろかもも何になりませう。わたし達は息の絶ゆるまで、時の終るまでこゝに留ります。この言葉を舟にのせて、エメンのコンチュバーのもとにお持ち下さい。

フアーガス(羊皮紙をとり集めて)

ではどうしても行かれぬのですか？

ナイシ

参りません……わたしには恐怖があるのです。夏も、冬も、秋も、春も、藪で昏黄まで鳥が騒いでゐる時も恐怖があるのです。然しこのことはわたしを慰めます。そしてわたし達はたとへ鷺や鮭やブリテンの烏程長生きをいたしましても、若木の葉のやうに幸福であり、そしていつまでもさうだといふことが判ります。

フアーガス(怒つて)

お前の兄弟は何處にゐる。わたしは彼等にも用事があるのだ。

ナイシ

上の流れの傍でかほそ獺をとつてゐます。

フアーガス(苦々しく)

わたしはお前達をたゞの獵師かりうじだと思つても大した間違ひはなかつた。

フアーガス退場。ナイシ天幕の方を向き、デアダアが上衣を顔にあて、蹲つてゐるのを見る。デアダア出て来る。

ナイシ

お前はわたしがファアガスに言つたことを聞いたとらう。(答へず。間。彼女を抱く)心配おしでない。今宵あたし達は流れに従つて鮭の泳いでくるルアドの谿へ行かう。(十字を切つて腰を下ろす)

デアアダア(大層低い聲で)

流れと共にわたし達は直ぐに又旅をするでせう。それでなければわたし達は殺されてしまひます。

(向き返り、後に縋る)夜明も、夜も、冬も、夏も速かに過ぎて行きます。何うしたならばいつ迄も、あなたとわたしとは楽しく暮せるのでせう。ナイシ様。

ナイシ

死ぬるまで我々は何よりの樂みを持つてゐる。ファアガスの面白い手柄話も、我々をエメンに連れ戻ることとは出来ない。

デアアダア

面白い手柄話のあつた所へ行くのではなく禍に近寄るのです。そして太陽のやうに輝くあなたの生命を縮めるでせう。わたし、デアアダアがあなたをお留めすることの出来ないのは、情ないことでは御座るませんか。

ナイシ

わたしはいつまでもアルバンにゐると言つたではないか。

デアアダア

いつ迄も留まれる所は御座るません。……唇を押し合ひ、登つたり下つたりし、お互ひに相手の腕の中で休み、草の上に六月の香を嗅いで眼を覺し、高い枝の中の小鳥に耳をすませてわたし達は永い間暮して來ました。……永い間暮して來ましたが終りが參りました。

ナイシ

理由をきかれても答へられないのに、お前はわたし達をエメンに行かせたいのか。北から來る鶴のやうに、又は暗い海の上を飛ぶ若い鳥のやうに旅をしたいのか。

デアアダア

結果にはいつも理由があります。ナイシ様、わたしは太陽が低くなり、暗い空を月が支配する冬に出て行くのが嬉しいのです。はつきりした林の後には光があり、茨の上の莓は紅の壁のやうだった今日までの日をよく送りましたからね。

ナイシ

此處にゐる時が終つたのなら、エンリもアーダンも連れずに東の森に行かう。二人の戀人が戀の外には何にも考へない時には、總ての人を離れてもいゝのだからね。行かう、さうすれば我々はいつまでも安全だ。

ディアダア(断腸の思ひて)

この世には何處にも安全な場所はござるません。ナイシ様……静かな森の中にわたし達の墓が掘られるのを見たのです。輝いた枯れた葉の上に土を投げながら。

ナイシ(尙熱心に)

お出で、ディアダア。晝と長い夜との間の小さな隅で休んでおる間は、安全な土地のことも墓のことも考へまい。

ディアダア(はつきりと、重々しく)

今こそ晝と永遠の眠のある夜との境に入るので。それ故頭を垂れ足をひきさりながら、いつか楽しく又優しい愛に破滅の來るのを見るより、近づいた死を追ふ方がよくはないでせうか。

ナイシ(迷つて、弱つた聲で)

若しも近くにある死が訪れたなら、地を失ひ、その上の星を失ひ、そしてそれらの焔であり輝いた王冠であるお前、ディアダアを失ふわたしの禍はどんなだらう？ 安全な森へおいで。

ディアダア(靜かに頭を振つて)

愛を衰へさす道はサムハンの夜の星の如くに多くあります。然し少しの間でも生きており、愛を續かせるの道はありませぬ……それ故、戀人が眠つてゐるのを見守つてゐる戀ほど、淋しいものはな

いのです……わたし達は濱の潮が變つたらエメン、マチヤに出發させよう。

ナイシイ

さうだ。熱愛する戀人達が年を取り、物倦けになるのを見るのは情ないものだ。

ディアダア(一層優しく然も烈しく)

わたし達は七年の間荒々しいことも、疲れることもありませんでした。七年の間大層楽しく又華やかに暮りました。神様も七日とこのやうな日を下されることは御困難でせう。その爲めにわたし達はエメンへ參るので御座ります。そこには永遠の休息が御座りませう。また多くの人々のざはめきの中におれば自然と忘れもいたしませう。

ナイシ(非常に穩かに)

覺めることの比類なく早い戀をいつまでも見守つてゐずに行かう。(しばし互ひに縋り合ふ。やがてナイシ顔を上げる) ファーガスとラバーハムとわたしの二人の弟が来る。

ディアダア去る。ナイシ頭を下げて坐る。オーウエン抜き足で駆け入り、ナイシの後にまはつてその兩腕を抱く。ナイシ振り拂つて劍を抜く。

オーウエン(馬鹿にしたやうな笑ひ聲を上げ、空手を見せる)

あゝ、ナイシ、あの時わたしはあなたを殺さなくつてよかつたね。えらく驚くぢやないか！ わた

しは上でフアーガスの番をしてゐたのだ。——驚かなくつてもいゝさ——あいつが素下ない挨拶をされて、獨りほつちで歸つて行くのに見にわたしは來たのだ。

フアーガス及びその他の者登場。女王のお通夜に列した人々のやうに、一同森としてゐる。

ナイシ(刀を鞘に納めて)

來たな。(フアーガスの傍に行く)潮が變つたらわたし達は歸ります。わたしもディアダアもあなたと一緒に参ります。

一同

歸るんだつて!

エンリ

たとへディアダアが、遠く町を離れてゐる小さな仲間を元氣づけるには並ぶものはない者にせよ。あなたは彼女と一緒に生命をお棄てになるのですか?

アーダン

七年の間わたしとエンリとは、あなたとディアダアの爲に下僕となり獨身でおりました。何故あなたはディアダアをコンチュバーのもとへ連れ歸るのですか?

ナイシ

わたしはディアダアが望んで擇んだ通にしたのです。

フアーガス

愛蘭國中の賢者が喜ぶやうな擇び方をあなたはしたのだ。

オーウエン

コンチュバーのもとに歸るのが賢人だつて? 若しもナイシがわたしの父の肋骨に劍を通さなかつたら止めるのがなあ。人の肋骨に劍を通すやうな者はあなたの誓などは信じないだらう。コンチュバーの所へ行く! 悪企みや、計畫や、間諜には、その働きに對して澤山にお金を頂戴することが出来るのだ。(金貨の入つた袋を投げ出す)フアーガス、お前も澤山に戴いたかね。

フアーガスに金貨を浴びせる。

フアーガス

氣が違つたのだ……捕まへろ。

オーウエン(彼等の間を逃げ廻つて)

お前には捕まらんよ。お前さん方はエメンへ行くがい。然しわたしは先に御免蒙らう……死人! 死人! ディアダアの美に溺れて死ぬ人々、わたしは一足先に墓へ行かう!

ナイフを手にして駆け出す。ラバーハムを除く外悉く彼を追ふ。ラバーハムは外を眺め、それから手を

しつかと組み合はせる。デアアダアは黒味がかつた上衣を着て現はれ、ラバーハムの傍に行く。

デアアダア

どうしたの？

ラバーハム

オーウエンが氣違ひになつたのでござります。そして石の端で自分の喉を裂いてしまひました。今日あの人の眼には不運の光がありました。そして若しもあの方がそれを言つたことがあれば、あの方はある力をよく知つておつたのでござります。

ナイシ他の人々を伴つて急いで戻つて来る。

エンリ(非常に興奮して入つて来る)

あの男はコンチュバーの企みを知つてゐるのだ。我々はエメンへは行くまい。エメンではコンチュバーがデアアダアを愛して、そしてあなたを憎むでせう。

フアーガス

あなたは馬鹿な氣違ひの言ふことを眞に受けるのかね。

エンリ

狂人が賢い者より利口だつたことが澤山にあります。我々はコンチュバーには従ひません。

ナイシ

わたしとデアアダアが擇んだのだ。わたし達はフアーガスと一緒に歸らう。

アーダン

わたし達は歸りません。わたし達は海邊のあなたの舟を焼いてしまひませう。

フアーガス

わしとわしの伴達が守護しやう。

エンリ

わたし達はアスナの角笛を吹かう。そうすれば友達が助けに来てくれるだらう。

ナイシ

来るのはわたしの友達だ。

エンリ

あなたの友達は頭の狂つたあなたの手を縛つてしまふでせう。

デアアダア急いで前に出て、エンリとナイシとの間に入る。

デアアダア(低い聲で)

七年の間といふものは、アスナの息子達は喧嘩をして、聲をあけたことはありませんでした。

エンリ

わたし達はあなたをエメンにやることは出来ません。

アーダン

わたし達の平和を破つたのはコンチュバーです。

エンリ(ディアダアに)

ナイシの行くのを止めて下さい。若しもコンチュバーがあなたを奪つたら、わたし達はどうして生きて行かれませう。

ディアダア

誰もあなた方からわたしを奪ふことは出来ません。わたしがファーガス様と一緒に歸るやうに擇んだのです。エンリ、わたしは七年の間アルバンであなたの女王でしたのに、あなたはわたしと争ふのですか。

エンリ(突然沈静に歸して)

ナイシはあなたをお連れする必要はないのです。

アーダン

何故あなたはお出でになるのですか？

ディアダア

それはわたしの望みなのです。……わたしは老婆を傍にして、アルバンでナイシ様を老人にさせたくはないのです。若い乙女に「あれが若い時美しかつたディアダーとナイシよ」と指をさされたくないのです。わたし達の父が愛蘭王の御代にきつぱりと別れたやうに、勇しい映のある日にきつぱりと別れた方がよいかも知れません。それから又昔走り歩いたり小川を跳び越えた、あのスリーブ、ファドの土を踏みたいのです。(ラバーハムに)ラバーハム、丘の小屋の傍にあるわたし達の小さな林檎の樹を見たら、どんなに嬉しいだらうとわたしは思ふよ。ファーガス様、わたしは始終愛蘭から離れておるのは淋しいことだといふことを知りました。

エンリ(風して)

わたし達はアルバンの七年間を考へると、今日からは何處へ行つても淋しくない所はありません。

ディアダア(ナイシに)

いつかは此處も寂しくなるでせう。……海までファーガスのお伴をなさいませ。和睦の使を齎したのに、辛い待遇を受けたお客様ですから。

ファーガス

王の航海に相應しいやうにあなたの舟を仕度させやう。(ナイシと共に退場す)

ディアダア

槍をおとりなさい。エンリ、アーダン、わたしの前を通つて、入口にあるわたしの衣服を運ぶ騎手をお連れ下さい。

エンリ(彼女の命に従ふ)

飢い時も、寒い時もあんなに面白く運んだあなたのお召物を、今日は淋しい心を抱いで運ぶのです。

衣類を拾ひ集めて退場す。

ディアダア(ラバーハムに)

お前もお出で、ラバーハム。お前は年をとつてゐるから、あたしがすぐ後からついてつて上げるよ。

ラバーハム

わたしは年寄でござります。しかしわたくしが誇つておりましたあの望は破れ裂けてしまひました。

ディアダアを怖ろしげに眺めて退場す。

ディアダア(両手を握りしめて)

クアンの森よ、クアンの森よ、懐しい東の國よ！ 七年の間あたし達はたゞ楽しく暮しました。しかし今日は西に行くのです。わたし達は今日多分死に向ふのでせう。たとへ女王として死ぬのでも、死は情ない嫌なものに相違ありません。(靜かに退場)

(幕)

第三幕

エメン下方のテント。みまぼらしい數枚の獸皮と腰掛が數脚ある。兩側と背後には出入口がある。背部の出入口は閉されてゐる。老婆食物や果物を持つて入り來り、テーブルの上にそれ等を並べる。コンチユバー左手より登場。

コンチユバー(荒々しく)

誰もわしの所へ報知しらせを持つてやつて來ないか？

老婆

誰もお見えになりません。コンチユバー様。

コンチユバー(暫時彼女の仕事を看守る。そしてそれから背後の出入口が閉されてゐるかどうかを確める)お前は此處には用はない。だからエンメに行け。(左手に音がする)誰だ？

老婆(左手に行き)

ラバーハムが又參つたので御座ります。あの方はことごと不思議に歩き廻つておられます。あの方はあの方々にたしかに出會はなかつたで御座るませう。しかしあの方はたゞ獨りで參られました。